

ぶどうの木

第 28 号



基督伝道隊

八幡前田教会
大濠公園教会
戸畑教会

目次

巻頭言	榎本 利三郎 (前田)	1
信仰告白	正野 栄子 (大濠)	2
神様に捕えられて	隈上 麻衣 (大濠)	4
朝の覚え	上野 米子 (大濠)	6
娘が受洗に導かれて	正野 悠子 (大濠)	7
主に生かされて	正野 悠子 (大濠)	9
お証し	大口 和子 (前田)	10
神は生きていられる	久保田 宮子 (戸畑)	12
恵みのとき	上野 米子 (大濠)	13
主の御業によつて	隈上 早歌 (大濠)	14
主の慰め	小南 房子 (前田)	17
主の恵み	井上 文子 (都城)	20
主人の思い出	丸山 恵美子 (都城)	23
第三ステージ突入の記	正野 真宏 (前田)	28
交通事故顛末記	正野 真宏 (前田)	31
わが恩恵なんじに足れり	高木 ツルエ (前田)	38
聖地訪問の旅に導かれて	川越 シズエ (前田)	41

手紙	城 正俊 (大濠)	44
叔父の遺訓	榎本 百合子 (前田)	47
詩集「別れの日々」	伊規須 太郎 (戸畑)	51
(脆くはあるが暗くない)より		
我が思い出 (移動編一)	鈴木 一幹 (前田)	56
大阪集会のお恵み	石丸 幸子 (大阪)	67
主のみ業を拝して	榎本 和義 (大濠)	73



巻 頭 言

榎 本 利 三 郎

『主に感謝せよ、

主はめぐみふかく、

そのいつくしみは

とこしえに絶えることがない。』

(詩篇一一八篇一節)

ぶどうの木も皆様の祈りに主が応えて下さって、今年は格別沢山の果実を与えて下さいました。夫々甘い味、苦い味、酸っぱい味、辛い味と多様な味がそれぞれの独特な味を交えて、私共を楽しませてくれます。

イスラエルの民が、エジプトからカナンへ四十年の荒野の旅において、マナを以って養われた様に、朝に夕に聖言の多種多様な味わいを「ぶどうの木」によって味わわせて頂き、感謝です。

更に此の一年も大胆に実を結び、主に喜ばれる様祈ります。



信仰告白

正野 栄子（大濠）

わたしは、クリスチャンの家庭に生まれ、母の胎内にいるときから二十二年間、毎週教会に通い、毎日聖書を読み、何かあるたびに祈るという生活を続けてきました。

とはいえ、やはり決して自分から進んで主を求めることはなく、「両親を媒体にした信仰」つまり「両親が言うから教会に行き、両親が言うから聖書を読み祈る」という、まさに形だけのクリスチャンでしたし、むしろ人一倍感情の起伏が激しく、自分の思い通りにいかないことがあるとすぐイライラしては主を悲しませてばかりいる落第生でした。

しかし主はそんな私を恵んでくださり、生まれたときからトラブルの絶えない子にしてくださいました。そのため主の存在を感じることでできる機会も人一倍恵まれていたように思います。

未熟児として生まれ、自力でお乳も飲めなかった私が、ここまで生かされてきたこと、五歳の時に、滑り台の上から石を投げられ、頭を何針も縫う大怪我をしたのに、なんの障害も残らなかつたこと、中学三年の夏に肺炎にかかり、生死の境をさ迷いながら、再び健康を与えられ、しかも志望の高校

に合格させて下さったこと、絶対にムリだと担任から言われていた大学にも推薦で合格させて下さったこと、これは受験当日に聖書を読んだとき、「主があなたがたのために戦われるから、あなたがたは黙していなさい。」との山エジプト記のお言葉をいただき、確信を持って受験に臨むことができたからにほかなりません。また、願っていたイギリス留学も、すべて主が必要を与えてくださり、実現できたこと、交通事故に遭っても、無傷ですんだこと、ほかにも挙げればいくらでも出てきます。

これらは、すべて私の名前の由来である、ヨハネによる福音書の「もし信じるなら神の栄光を見るであろう」というお言葉そのものです。主が栄光をわたしに示して、「お前はわたしのものだよ、早くわたしに従ってきなさい」と教えるために、こんなにするばらしいことをして下さったのです。

しかし、愚かな私は、こんな大きな恵みに気づかず、不平不満ばかりで感謝することを忘れ、自分に都合の良い結果が与えられると初めて主に感謝するという有様。けれども主は、そんな私を見捨てず、さらに大きなお恵みを与えてくださいました。

両親との喧嘩から、教会の各御集会に励まなくてはならなくなつたのです。

もちろん、最初は本当に面倒くさく、御説教中でも、こんな暇があつたら、「バイトでいくら稼げる」とか「終わつたらビデオでも借りて帰ろう」とか、どうでもいいようなことばかり考えてご説教の時間が過ぎるのを待っているような状態です。ですから、もちろん先生のお話を理解しているはずもなく、先生には本当に申し訳無かつたと思います。

そんな苦痛の口々が二ヶ月ほど続いたある日、主はついに立ちあがって、私のつんぼな耳を開いてくださいました。ある日を境に、急に先生のお言葉が耳に残るようになったのです。別に何の努力をしたわけでも、何か深刻な悩みがあつたわけでもありません。しかし、先生がいわれていることが、ちゃんと理解できるのです。さらには受洗に対してなんとなくてれくさいし、またこれによつてクリスチャンらしい生活を強いられることになるのなら、自分にとつてマイナスだというイメージさえ持っていた私が、バプテスマを受けることで、これからの長い人生を歩んでいくその隣にいつも主がいてくださるのなら、これは実はとんでもなくすばらしい恵みなのではないか？わたしはそんなすばらしい恵みにあずかるチャンスを見すみす逃しているのではないか？と思うようになりまして。こんなドラマティックな変化を、今までのように事件やトラブルを起さずして、まさに「無」から「有」

を起こしたもう主が、私に対する御愛のゆえに、惜しむことなく与えてくださったことは、私にとつては本当に大きな驚きでした。自分の中で、今まで大事だと思つていたものが、ガラガラと音を立てて崩れていくのがわかりました。今は甘えていられる両親も、いつかはわたしのそばからいなくなります。友達だつて、少し距離や時間が離れただけで疎遠になつてしまいます。一生懸命勉強したという事実や、有名大学や大企業というステイタスも、主の裁きの前では、ただのゴミやカスにすぎません。そして、それらのものを取り去つてしまえば、今の私には本当に何も残らないのです。主の前に誇れるものなんて何一つありません。

それでも主は、私を愛してくださいました。母の胎内にいる時から今に至るまで、一日の例外もなく、主の憐れみの中に生かされてきました。いろいろなトラブルを通して、「早くわたしに帰つてきなさい」とわたしを待っていてくださったのです。しかも、あれだけたくさんの問題を起こされても変えられることのなかつた無信仰な私を、なんと今度は何もないうところから、完全に「主に生きる者」へと変えてくださるというとんでもなくすばらしいお恵みを与えてくださいました。このような主の計り知れないご計画の前に、私は降参せざるを得ませんでした。

小さい頃から「ただよりこわいものはないんだよ」と教え

られてきたけれども、主は「あなたがたは来て、金を出さずに、ただでぶどう酒と乳とを買い求めよ」と、こんな無価値な私を選び、しかも見返りを求めずして私を招いてくださる。その主にお従いしていきたいと心から思いますし、主を信じるといふことは、昔感じていたように、面倒くさいとか見えないから頼りないとかそんな低俗なレベルの話ではなく、まさにわたしの生きる糧にほかなりません。

もちろん、主の持ち物であるはずの自分の体や、周囲の行動にいちいち腹を立てたり、不平不満がでたり、平気な顔で嘘をついたり、「あーあ」とため息をつくこともたくさんあります。私には、そんな自分を変えることなどできませんし、なおさら思い通りに行かないことに不満がつのるばかりの毎日です。

しかし、主は私を新しく生まれ変わらせてくださることで、できるお方ですから、すべてを主にゆだね、これからの生涯を主と共に、そして主の栄光を現すものとして歩んでいきます。ありがとうございます。

神様に捕えられて

隈上 麻衣(大濠)

私は教会が嫌いでした。神様なんて必要ないと思っています。した。

私は、牧師の娘として、教会に生まれ教会に育ちました。幼い頃から、教会学校に通い、聖言を暗誦し、祈ることを教えられてきました。しかし、長い間、私はその事を喜ばずにいたのです。もし、私の家が教会ではなく、又、父が牧師でなかったらどんなにか良いだろう、長い間ずっとそう思ってきました。というのも、決まって日曜日にある運動会や音楽会、授業参観に誰も来てくれないことが惨めで仕方がなかったからです。父は勿論のこと、母も奏楽者ですから、少なくとも礼拝が終わるまで、教会を離れることが出来なかったのです。頭では、それが仕方の無いことだと分かっていました。それでも、もしうちが教会でなかったら、多くの友達と同じように、頑張っている自分を父親や母親がみにきてくれるのだと、そう思っていました。多くの友達が母親と下校する中、一人で帰ることが嫌で仕方がなく、学校を休みたいと何度も思いました。幼い頃から神様は生きておられるのだと教えられてきましたから、神様の存在は、漠然と信じていま



した。けれども、だから何だというのでしょうか。神様がいるお陰で私は惨めな思いをしなければならぬ、そんな恨みにも近い思いすら抱いたこともありました。私にとって神様は遠い親戚のようなものでした。何処かにいるのだからうけれど私には関係のない存在なのだ。

そんな思いもあり、又、幼い私は教会や神様に両親がとられたのだと思ったのでしょうか。教会から、そして神様から少しずつ少しずつ離れていきました。

中学、高校と進学するにつれ、私は祈ることを忘れ、教会に住んでいながら教会に通うことを忘れようと思いました。しかし、神様は本当に憐れみ深い御方です。心も体も神様から離れようとしたその時に、素晴らしい試練を私にお与えになりました。

日々の生活の中で、喜ぶこと、感謝することを忘れ、高校時代全く勉強しなかった私は、当然の結果ですが、一年間浪人することとなったのです。

福岡の大学を受験するために、家族と離れ浪人することを通して、神様は、私に多くの事を教えてくださいました。それまでの私は、自分が頑張らさえずれば何でも出来るのだと思っていました。慰めは人に求めれば良いのだと思っていま

ないのだと思っていました。けれど、受験を前にして、私が目にした自分は、努力してもなかなか成績が伸びない、家族や友達のない場所で心細さを覚えるような、実に脆く弱い自分でした。

自分の弱さを知ったときから、私は少しずつ心から祈るようになりました。そして、それと同時に、自分に与えられている多くの恵みに気付くようになったのです。今この時、勉強する事ができる恵み、もう一度受験することが出来る恵み、多くの方が私の受験のために祈って下さっている恵み、そして何より、自分が神様に祈ることが許されている、より頼む事が許されている恵み、それらを思うとき、私の日々の歩みは、本当に喜びに溢れるものと変えられました。

そして、新年聖会で与えられた聖言、「人にはできないが、神にはできる。神はなんでもできるからである」(マルコ一〇・二七)との言葉を覚え、平安のうちに試験を終えることができました。そして、神様は、志望大学合格という素晴らしい結果までお与えになったのです。本当に神様は憐れみ深い御方です。こんなに愚かな私にさえ願った以上の御恵みを与えてくださいました。

大学に入学し、私は一つの思いを抱くようになりました。それは、立派な信仰がもてるようになったら受洗しようとい

(二〇〇〇年十月二十九日 洗礼式での信仰告白)

うものです。今思えばそれは、受洗することはある種の拘束を伴うのでは、という思いがあった私の逃げだったのだと思います。大学生活を送る中で、日々の楽しさから神様により頼むことを忘れた私は、立派な信仰を持つどころか、神様に背を向け、自分勝手に歩むような者でした。その様な中であつて過ちばかり犯す私を、神様は少しずつ御自分の元へと導いて下さいました。私は自分の力では神様を信じることは出来ません。罪を犯し、悔い改めても、又、神様を忘れて罪を繰り返すような愚かな者です。私は再び真剣に祈るようになりました。「神様、あなたを信じることの出来ない私を憐れんでください。あなたから離れようとすればするほど苦しいのです。どうか、お救いください」と。そして、全てを神様に委ねようとしたその時から、私は素晴らしい平安のうちに置かれたのです。

幼い頃から、神様を知りながら、背き続けてきた罪深い私のような者でさえ、神様は救ってくださいました。

教会なんて嫌いでした。神様なんて私から父や母を横取りするような悪者でした。けれど、結局、今も私は教会にいます。そしてこんなにも神様を必要としているのです。二〇年間逃げ続けてきましたが、どうやら、もう限界のようです。

神様、あなたを信じます。全てをあなたに委ねます。

朝の覚え

上野 米子 (大濠)



聖名を崇めます。

今夏も盛夏の候となり、夏も本番となりました。このところ体力の衰えを覚え、今朝も「命は糧にまさり」「体は衣にまさらずや」と主のみことばを覚えました。外的な美味の食より、又美しき衣より、主よりいただきました内なる命、健康な体がどんなに大切か、又大いなる恵であるかを教えられました。

風におよぐサルスベリの小枝が所々に伸び、美しい薄紅の花をつけ、ルビーのようにかがやいてゆれております。青い大空には白い雲が色々な動物の形に画かれ美しく浮かんでお

ります。そして主はまた「我が恵汝に足れり」と語っており
ます。主を覚えませす時、何一つ恵でないものはありません。
造り主を通して語られている命のみことばは、生きて働き「何
事も思い煩うな、只、事々に感謝を以って、祈りと願を捧げ、
あなたの求めるところを神に申し上げるがよい」(ピリピ四
章六節)と語っておられます。

今朝、息子は「お母さん、大丈夫？」と言葉をくれました。
又、帰宅した息子は「今、帰ったよ」と告げます。私は「お
疲れさま、ご苦労様でした」と言葉返します。一つ屋根の
下に生活を共にする息子と私の言葉の交換は、只一言ですが、
それで通じます。母子の心とは有難いものですね。

つよい台風六号の訪れに心騒いだ三日間でした。余りの風
のつよさに夜半そつと雨戸をあけ、庭を見ました。高く伸び
た南天の木は大きくゆれて、その枝も折れんばかりです。サ
ルスベリも体をふるわせ、ルビーを思わしめる花が散るので
はないかと思ひ煩いました。

翌朝は台風もおさまり、小枝の先の花もしっかり幹につな
がり、緑の葉も清く洗われ、その美しさも色を増し加えてお
ります。花はしっかりと幹につながり、一片の花も地に落ち
ていません。「我はぶどうの木、汝はその枝なり。我を離れて
はあなた方は何一つ出来ない。わたしにつながっていれば実

を豊かに結ぶ」とぶどうの木を通して神の御旨を語っておら
れます。御真実なる神は御実体をもつて私に迫ります。「我に
したがえ。」風にそつて流れた枝は折れることなく命を保ちま
した。

わが魂よ、主をほめよ

そのすべての恵を心にとめよ

詩篇一〇三篇二節

大いなる恵を感謝して、今朝の連想をお捧げ致しました。

平成一二年八月一日

娘が受洗に導かれて

正野 悠子 (大濠)

三月二十六日、次女の栄子が神様のあわれみで受洗させて
いただき、心から感謝しております。

この子は、小さい時から、何度も大病をし、弱い子でした。
一歳になってすぐ重度のはしかにかかり、四十度の高熱が

四・五日続き、脳の異常を心配したこともありました。よくなつたと思えば、一歳二ヶ月でヘルニヤの手術、また階段から落ちたり、滑り台の上から、下にいた榮子に、近所の男の子から石を投げられて怪我をしたり、病氣と怪我の絶えない子でした。唯、この子の誕生に与えられたヨハネによる福音書十一章四十節「もし信じるなら神の榮光を見るであろうと、あなたに言ったではないか」の聖言に委ね、神様におすがりするだけでした。

中学三年の時には、一ヶ月間肺炎で苦しみました。発病、前々日の礼拝で「わたしは限りない愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに眞実をつくしてきました」エレミヤ書三十一章三節の聖言をいただいていたので、彼女の看病をしながら、慰められ、力を与えられ、親子で祈りつづけました。神様のあわれみで、その中からも、すっかり癒していただきました。

大学三年の時のある日、今までと違った生活態度を注意しました。反抗したことの娘でしたが、その時は「教会に行っているから、いいじゃない。神様がどうされるか祈ってよ」と反撥してきました。それから、私は彼女の救のため、真剣に神様に祈りはじめました。その時、ヨハネによる福音書二十章十四節から十五節「そこにイエスが立つておら

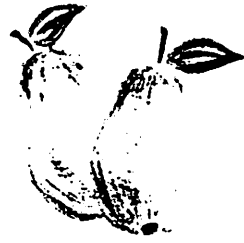
れるのを見た。しかし、それがイエスであることに気がつかなかった。イエスは女に言われた、『女よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか』という聖言を与えられました。この娘の問題の中に、甦りの主が立つておられることを知りまして、この聖言にひたすらよりすがり祈りつづけました。

大学四年になりますと、学校へ出ることも少なくなりまして、私は娘に「火曜会に行かない？」と、さそうと、素直について来はじめました。礼拝は勿論、日曜日の夜の集会にまでついてくるようになりました。二ヶ月位たった時でしようか、集会の帰りに「先生のお話がよくわかったよ」と、うれしそうに言いました。私は思わず「今まではわからなかったの？」と問うと、わからなかったというのです。驚きました。二十一年間も教会に來させていたのに、お話を理解しなかったとは！驚きでした。神様のおことばは靈によらなければ悟り得ないこと、靈の耳は神様からだけ与えられるものであることを、はつきり知りました。

また、論文を書いて、徹夜した翌日、火曜会に遅刻して出させていた後、「今日のお言葉は素晴らしかった。私のために与えられたのよ。疲れて迷ったけれど、来てよかった」と感動して言った「ヤコブよ、あなたを創造された主はこう言われる。イスラエルよ、あなたを造られた主はいまこう言

われる。『恐れるな、わたしはあなたをあげなつた。わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ』のお言葉を忘れることはできません。

それから娘の主を求める態度は真剣になつてゆきました。間もなく、自分で志願して、受洗させていただきました。廻りの主ご自身でみ業を全うしてくださいました。親娘共に、主にお会いすることをゆるされ、なんと感謝してよいかわかりません。地上に在る限り、親子共々、主を畏れてお仕えさせていただきますと願っております。



主に生かされて

正野 悠子（大濠）

私は今年六十二歳の誕生日を迎えさせていただき、心から感謝いたしております。

警察官だった父の仕事の関係で中国の牡丹江省に生を受け、今までに何度も死の陰の谷を通ってきました。五歳で肋膜炎

患い、七歳で終戦を迎え、父はシベリヤに抑留、母一人の手で四歳下の妹と帰国。妹は帰国途中で流行したはしかで亡くなり、私は守られました。中国残留孤児になることもなく守られ、一年後、無事に帰国しました。叔父の好意で、戦後の食糧難も全く知らず、何不自由のない生活をさせてもらいました。中学の三年の夏、突然、足が立たなくなり、急性リュウマチで三ヶ月寝たつきりの生活をしました。その頃は、シベリヤから帰国していた父がアルコール中毒で荒れ放題、家は倒産という悲惨な中で母は必死に看病してくれました。その時も神様は全く癒してくださいました。後遺症もなく守られました。その四年後、母は急死、父は放浪の生活に。私は生きる力を失いノイローゼになりました。自殺しようと考えた時、昭和三十五年五月の第一日曜に、はじめて教会（八幡前田教会）に出させていただきました。席についた瞬間に、「主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛とこのちを知った」というヨハネの第一の手紙三章十六節のおことばが耳に響いてきました。その瞬間から、生命まで捨てて愛してくださる方がおられるのなら、私は生きようと、力が与えられました。そこから恵みにあずかり、一年後、受洗させていただきました。これまで、神様の暖かいご愛に守られ導かれてきました。生涯のメッセー

ジとして、ヨハネによる福音書三章十六節「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」、創世記十七章一節「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ」とヨハネ黙示録二章十六節「死に至るまで忠実であれ。そうすれば、いのちの冠を与えよう」とのおことばを与えていただき、不忠実な者ですのに、赦されて今日まで支えられております。唯々、主のご忍耐のゆえです。

今は、イザヤ書十一章三節「彼は主を恐れることを楽しみとし、その目の見るところによって、さばきをなさず、その耳の聞くところによって、定めをなさず」とのおことばが、この身になりますようにと日毎に主に祈って、おすがりしております。又、生ける主の証人、聖霊の宮として、召された者にふさわしく、神様のご目的にかなう地上の生涯を全うさせていたきたいと切に願っております。



お証し

大口 和子（前田）

息子が小学二年生のある日、私は三階の主人のベッドのところで、主人とあることのため、格闘いたしました。私が勝ちました。そして朝食の支度のために、一番下の食堂へ降りていきましたところ、そのとたんに、心臓の動悸がひどくおこりました。声をだすこともできません。安静第一と思いついて、テーブルの前の椅子に、そつと腰掛けました。そして「神様、私が悪うございました。子供がまだ小さいので、どうか私の今までの罪をもう一度、許して、全く癒しの御手を差し伸べてください」と必死でお祈りいたしました。すると、詩篇二三篇の四節「たとい：いませばなり」との御言葉が与えられ、力づけられました。

動悸はまだおさまっていませんでしたが、そこに主人と息子が降りてきました。すると息子が私を見て、「あ、お母さん、真つ赤になってる」と心配そうにしていました。そこで「心配しなくても大丈夫だから、学校に行つて」と、そつとはうように二階の治療室のベッドに寝ました。主人も心配して、私のそばに来て、お握りを作つてこようかと言つてきました。そしてお握りを二つ握つてきてくれました。それがとてもお

いしくて、わたしは寝たまま、二つとも食べてしまいました。
ひとつでやめておけばよかったのですが、ふたつとも食べてしまったので、胃を圧迫しました。胃が膨れると、下から心臓を押し上げるので、食べ過ぎたらいけないそうです。

当時は電話もございませんでしたので、そろそろ歩いて、近くの病院へと参りました。すると先生は心筋梗塞だと言われました。私は家に帰る気力もございませんでしたが、先生に「大丈夫だから、大丈夫、大丈夫」と励まされ、またそろそろ歩いて帰りました。それからしばらく寝たり起きたり、の状態がずっと続きました。

ある方から、元年金病院の内科部長であられました山口先生が開業なさっておられますと教えてくださったので、早速バスで参りました。丁寧に診察を下さって、心電図、血液検査、脳検査などしていただきましたところ、これは心筋梗塞ではありません。心臓左室肥大ですと言われました。そして少しずつやせるようにと、ご注意頂きました。しばらくは一日おきでしたか、注射をしてくださいました。

その結果、5年間くらいでしたか、寝たり起きたりが続きましたが、だいぶ元気になりました。前田教会の榎本牧師ご夫妻をはじめ、信者の皆様方の陰にあってのお祈りに支えられました、不思議なように回復させていただきました。けれ

ど、なるべく安静にするようにと言われたので、寝たり起きたりの状態が続いていました。

そんなある日、突然主人の受け持ちの先生がお出でになり、来春卒業生が来るまで、〇〇病院で勤めてほしいと言われてました。すぐ〇〇整形外科へ連れて行きますが、病気のことは決して言わないでとおっしゃって、連れて行ってくださいました。早速その次の日の朝から勤めさせていただきましたけれども、途中で発作が一度も起こらず、無事に勤めさせて頂きました。

わたしはこのことを通しまして、神様は本当に全き癒し主であることを体験させていただきました。本当に感謝に絶えません。その後、立ち退きになりました、引越して、お薬を捨ててしまつて、神様だけにおすがりして参りました。この次の機会に御証しさせていただきます。今日はこれでつたない御証しを終えさせていただきます。

(二〇〇〇年二月六日 シロアム会にて)



神は生きていられる

久保田 宮子（戸畑）

一口では言へない位仲の悪い親子だった。私が信仰に入っただのもその為といった方が良いのかも知れない。榎本先生にもよくお話をしたものだ。

長男が生を受けた時はとても可愛がり、私も勤めていた関係上、どこに行くのも連れて行く若いお父さんだった。

学校に行つて成績が出る様になった頃より、仲が悪くなつて、どうしようもなかった。何回も家出したり、私も仲に立つて、本当に困つた。その時、信仰を持っていた妹にはお世話になつた。

成人式も東京で迎へ、そして何回か職場を変え、結婚した。嫁さんが良かったのでしよう、その頃に落ち着いてマンションを買い入れ、私達夫婦も招待されて行つた。

今では昔の事がうそのように（親子が）仲良く、家では一子のパパで理想的な家庭を営んでいる。

私も三人の子供がいますが、一番優しくて気がつく、月に一度眼科に車で連れていってくれるが手を引いてくれる、嬉しくて涙が出る。

私程恵まれている者はいないと自負しているが、この度、

腰の骨を折り、目まで緑内障にかかり、杖の身となつたが、本当に神は生きていてくれて、信ずる者を恥ずかしめる事をしないで、今では本当に仲のよい親子となつてうれしい。神は生きて働いてくれるとつくづく思う。



恵みのとき

上野 米子（大濠）

尊き御聖名と御宝血を崇めて感謝申し上げます。

梅の花もほころび、小鳥のさえずりを耳にして早春の候を迎えました。旧冬の寒さいまだ去りやらず、朝夕の冷えを覚えます。私は昨秋より体調を崩し、弱きをおぼえていましたが、新年になって早々入院することになってしまいました。

一月六日の夜半を過ぎた頃、ベッドの脇に滑り落ちて立ち上がれず、家族の眠りを覚ましてはと思い、夜明けまで待ちました。待つと云う時は何と長いことでしょう。私の体はすっかり冷え切つて、骨の関節に痛みを覚えつつも立ち上がれずに横たわっていました。そのさまは轍に押しつぶされた蛙のようでした。家族が目覚まして、救急車で病院に運ばれ、二週間のベッド生活がはじまりました。この入院を通して主は私に何とおさとしく下さいましたでしょうか。先ず、造り主を覚え、主の御愛を覚えしました。そして私の天国でした。八十余年の生活の中で、目に光なく、耳に音なく、手に何の感触もなく、また、脳の働きもなく、全くの空白をいただきました。この空白は人の世の痛みと煩雑を取り去って、私に安らぎを与えてくださいました。主はまどろむむことなく、私

の眠りを祝していただきました。主は申されました、「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である」と。

私達には過去もなく、未来もなく、只在るは「今」と云う時である。主は摂理を以つて目を覚まさしめ、被造物としての自覚を更に覚えさせてくださいました。

「われらは主の聖なるみ名に信頼するがゆえに、われらの心は主にあつて喜ぶ。」（詩篇三十三篇二十一節）救われし者の幸いを覚えます。そして一月半ばに完治ではございませんが、家庭での静養を申し渡され、日々祈りのうちに感謝する生活をもつて生かされております。

また、我が家族も命のみことばを通して、主の御旨を覚えしめ愛の労をとり、日夜臨んでいたわっていただいております。身近に起こる数々の試練は更に信仰の深みへと導いていただく大いなる主の恵みであることを覚えます。主は生きておられます。「力なき者の弱さを負え」とお語りいただいております。自分の老いを省み、主の御手にゆだねて、「然り、然り」と答えて、家族の中においていただいております。感謝です。牧師先生のお祈り、兄弟姉妹の御加禱、家族のいたわり、全てが感謝です。そして最後になりましたが、主の御体なる教会をいただいていることは最高のお恵みです。

「あなたがたはわが証人、わたしが選んだわがしもべであ

る。」(イザヤ書四十三章十節) この感銘深きおことばは日々
私に迫ります。

平成十三年二月二十八日



主の御業によって

限上 早歌(大濠)

このたび、二月二十日から二十七日(平成十三年)にかけて、イギリスのロンドンへ旅行する機会が与えられました。榎本和義先生と文子先生がイタリア旅行から帰ってこられ、土産話を聞いていると、海外では本当に色々なものに触れることが出来、また、普段の生活では想像することができないことに出合つて、戸惑つたり、不安になることがあるということでした。この話を聞いている時には自分が海外旅行に出かけるなんて考えもしませんでした。郷里の愛知県にいますきは、海外へ行くことなど夢見るような気持でしか聞いていませんでした。家族が多くて、費用の問題もあり、課題だらけでした。それに加え、私は「超」の字がつくほどに心配性で、怖がりです。臆病ですから、到底ありそうもないことでも「いや、ひよつとしたら」と思つて、踏みとどまってしまうことが多く、自分の狭い視野でしか周囲や世間を見ていませんでした。

昨年、郷里から福岡へ出てくるときもそうでしたが、今回も神様が私の内に働きかけてくださつて、勇気を与えてくださいました。多くの人から、「海外旅行に行くのに、なぜ、そ

んなに怖いことばかり想像するのかしら」と言われますが、そんな私にとって、今回の旅行は自分の弱いところを変えていただく大きな体験でした。出かけるまで、不安と心配ばかりしていましたから、現地に着いたらもつと大変だったろうと思われませんが、私自身も想像していなかったほどに、ロンドンに着いてみると、不安もなく違和感ありませんでした。日本人の観光客が周囲に沢山いたり、文子先生、正野聖美さん、姉の麻衣さんと一緒だったので、言葉の通じない中でも不安がありませんでした。一度、私だけが地下鉄の電車に乗り遅れて、一人で電車に乗って帰らねばならなかった時は、さすがにそれは怖くて、心細く不安になりました。やはり同伴者がいる時とは大変な違いでした。

そんな中から、日本語が全く通じないロンドンで、言葉が理解できることがどんなに幸いか、知りました。普段は相手の言っていることがすぐに理解できますし、私も伝えたいことを言うことに困ることはありません。ロンドンで可愛い子供さんをつれた方に「可愛いですね、おいくつですか」と聞きたくても、思うように言葉（英語）が出てきません。言いたくても言えず、ただ見て、微笑むことしかできませんでした。まず、言葉について考える機会が与えられました。

日本からロンドンまで、十二時間以上も狭い座席に腰掛け

続けて、窮屈な思いをしてやつとホテルに到着し、部屋で靴を脱いでホットしました。足を伸ばし、歩きまわれる自由はとても気持の良いことです。私はめんどくさがり屋で、気分が乗れば、楽しく動き回りますが、ちよつと疲れたり、気分が乗らないと動くことが億劫になります。積極的に何でも好奇心をもつて見て回ることが苦手でした。ロンドンへ行くと、珍しいこともありすが、「せつかく来ているのだから、いんななものを見て、触れて、体験したい」と思いました。

ですから、気分によらずに、積極的に歩き回り、日本では経験できないこともあつて、毎日充実した日を過ごすことができました。健康で、元気が与えられて、動き回れることがどれほど感謝すべきことか、ということが分かりました。また、自分の目で見て、手で触れること、体験することであるんなことを知ることができ、感じることで、感謝でした。

食事についても、自分の好きなものを食べていると「美味しい」と思い、幸せを感じますが、自分が嫌いと思つているものだと、食べないうちから「いやだ」と敬遠してしまうような私です。しかし、ロンドンでは自分の好き嫌いを言っておれません。とにかく食べてみなければ分かりませんから、美味しくないだろうと思つて食べたものが、意外と美味しいものだと知ります。美味しくなくても、また別の店では美味

しいかも知れない、と思えるようになりました。また、期待したとおりでなくても、その経験をしたことが無駄ではないと思えるようになりました。神様が私の内側を変えてくださって、自分の先入観でことを決めず、どんなことでもチャレンジしてみようと思えるようになりました。

今回の旅行で、外側は食べることが多くてふくらんだのですが、内なる変化が大きな収穫でした。見るもの、聞くもの、どんなことも全てが勉強でした。言葉について、積極的な行動について、食事などの自分の好き嫌いについて考える機会が与えられました。旅行に来てこんな大きな体験をすることになるとは考えてもいませんでした。まったく神様のなさることは測り知ることができません。

四月から私は短大の二年生になります。進路の問題にぶつかります。就職難ということもありますが、私は「本当にこの道で良いのかしら」と不安があります。しかし、旅行を通して教えられたように、神様に全て委ねて、祈っていくとき、外側は変わらなくても、内なる人を強く、新しくしてくださいることを実感しています。最後ですが、ロンドンでセント・ポール大聖堂を見学したとき、私はまだ受洗前ですが、勧められて聖餐式に加えていただきました。これも神様のお恵みだったと信じます。こうして、感謝しつつ無事に帰国するこ

とができました。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものは、これによつてできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。」ヨハネによる福音書 一章一節—二節



主の慰め

小南 房子（前田）

『わたしは、あなたのわざを知っている。あなたは冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。このように、熱くもなく、冷たくもなく、なまぬるいので、あなたを口から吐き出そう。』

（ヨハネの黙示録三章一五、六節）

『冷たいか、熱いかであってほしい』というみ言葉を聖書の中に見いだして、いつも信仰の姿勢を問われつづけてまいりました。昭和二九年、友人と四、五名で、会堂もなく、牧師もおらず、集会場も定まらず、ただ教会名だけある中で、私たちは聖書を輪読し、讚美歌を歌って、お祈りをするという日曜礼拝を守っていました。それが私の教会の礼拝であり、信仰生活の始まりでした。昭和三十一年クリスマスにバプテスマを受けさせていただきました。その後少しずつ地域の兄弟姉妹が集まるようになりました。宣教師も応援して下さり、土地を求めるところから始め、会堂建設に歩み出し、神様のご計画のうちに献堂式を迎えました。

『彼らに言われた、「時期や場合は、父がご自分の権威によって定めておられるのであって、あなたがたの知る限りではない。』」（使徒行伝一章七節）

その当時は、神様が備えて下さったのだと単純に思っていました。父がご自分の権威によって定められたのである、二〇〇〇年前すでに聖書の中に神の手によらなければ、時も場合も、あなたがたの知る限りでない、とあるのだからと、ご計画であったことに感謝し、新しい会堂で昭和三十五年の春から礼拝が始まりました。教会の住所さえない、無牧の教会を哀れみ給い、奉仕していた神学生を初代牧師として、招聘することができ、教会も形づくられてまいりました。

そんな頃、私も職場でなんとなく過ごして使命感のない場から、生きがいのある職場を求め、京都のバプテスト病院へ参りました。職員全員がプロテスタントのクリスチャンで、全国から集まってきた宗派の違う人々でしたが、お恵みの中で生活させていただきました。チャペルでまず礼拝し、それから職場に向かい、一日の生活が始まります。病室の患者さんはスピーカーを通して、歩ける人はチャペルでメッセージを聞くことができます。そして夕礼拝は病室へと放送されました。そんな中で私は各教派によって信仰の歩みが違ってい

ることに気づき、他病院のクリスチャンナースとの交わりの中でいろいろ教えられるにつれて、これは何が違うのかと自問していました。その確信の持てない信仰が結婚という形に現れたのだと思います。牧師の薦めで、ただ牧師を信じて、今、私に与えられた使命だと思い、何の不安もなく、家庭を持ちました。両親はクリスチャンであり、彼は求道者だと聞いていましたが、実際の家庭生活は私のそれまでの家庭生活とかけ離れていて、どうしていけばよいのか、とまどい、すっかり落ち込んで、希望を失いました。「あなたは聖霊を受けていないから、にセクリスチャンだ」と何かにつけて非難され、事々につらい思いで耐えられず、遂に別居に踏み切りました。しかし牧師は「結婚した後の事まで知らない」と全く支えていただけず、何とか神様に近づけさせていたきたいと近くの教会の礼拝に出席していました。前田教会にも、旧

会堂の時から、勤務の休みには出席していましたが、会堂建築の最中で、しばらく中断してしまい、新会堂が出来あがって、再び出席するようになりました。京都での他教会の信仰に近づきたいという願いが実現した喜びでいっぱいでした。ある教会で文鮮明の統一教会の二万人集会に出席したり、異言を語ったり（全員が立ち上がり、大声でラッパの他、鳴り物入りでハレルヤ、アーメンと主を賛美する）する有様は、

異様で、座席に座っているのは、私一人でした。これが神を礼拝する姿勢だろうかと驚き、二度と出席しませんでした。家庭の中も悲しく、つらいことばかりで、離婚を考え、牧師に相談しても、全く取り合っただけで、結局自分で決断してしまいました。

『あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられない試練に合わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるようになるのがれる道も備えて下さるのである。』

（コリント第一 一〇章一三節）

このお言葉にどれだけ励まされ、慰められたことでしょうか。結婚についても、神のみ前に誓約いたしました。病める時も、健やかなる時も、と、キリストの救いを求めず、享楽に身をくずして、会社を無断欠勤する、上司に呼び出される等、多くの問題を起こしても、両親は何一つ、祈ることさえ力になつてもらえず、わたしを導くこともできず、この試練から逃れさせて下さいと、祈って、神に許しを請い、十一年の生活をもって離別しました。

『しかし、主は真実なかたであるから、あなたがたを強め、悪しき者から守って下さるであらう。』

(テサロニケ第二 三章三節)

月に一度くらいしか礼拝に出席できませんでしたが、榎本牧師にバプテスマを受けさせて下さいとお願いして、二度目のバプテスマを受けさせていただいたのが、昭和五十一年四月でした。第一回目より二十年経っていましたが、神の目前に近づけていただくようになったのは、五十八歳で退職してからでした。長い間、同居していた母の介護をして、平成七年九月、母を見送り、やっと自分の老後に目を向けることができるようになり、教会の近くに住みたいと願って、マンションを購入しようとしたのですが、自分が先走ってしまい、神様の御心でなく、自分の思いだけで事を運ぼうとしたため、失敗しました。

「ぼけ老人を抱える家族の会」の活動として、新しい形態のケアハウスを見学するため、福岡あたりまで何ヶ所もみてまわり、関心はあったのですが、自分がそこに住むとは思っていませんでした。部屋の広さ、施設の内容、交通アクセス、入居費用などを調べていたので、平成十二年に八幡に家を探していることを知った姉妹がケアハウスに空きがあると教えてくださり、二人で見に行き、ここであれば条件に合う

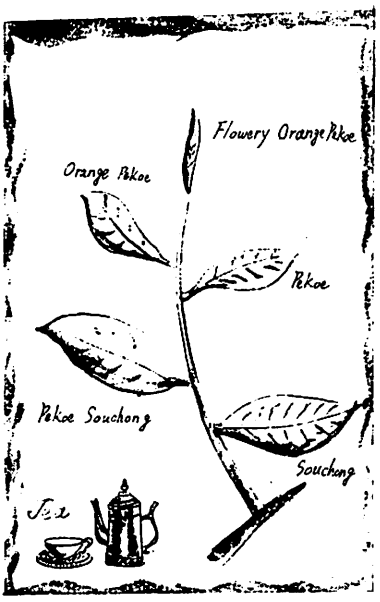
し、教会生活も送れると決断し、早速、申し込みをして、三月に入居決定、四月四日には転居しました。何年も前から望んでいたことを、こんなに短期間に与えられたのは、神様のお導きだと信じ、感謝です。

ケアハウスの入居に際して、兄弟姉妹に支えていただき、お力添えを感謝いたします。ありがとうございました。

『しかし、あなたは、自分が学んで確信しているところに、いつもとどまっていなさい。』

(テモテ第二 三章一四節)

主が最善のことを成してくださるから、お任せして従っていきたく願っています。



主の恵み

井上 文子（都城）

「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていないさい。」

（テモテ第二 二章八節）

「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である。」

（コリント第二 六章二節）

神様のあわれみにより、今年の聖会に導かれましたこと、こころより感謝に絶えません。榎本先生ご夫妻、皆様のお祈りをありがとうございます。

親の心子知らずというか、無知な者も主のあわれみにより、今日まで生かされております。聖句を改めて拝見し、「今あるは神の恵み」と教え示されています。そして神様からいただいた多くの恵みを、お証しさせていただく時を与えられ、感謝です。

金生先生から以前なんでも書くことがあれば書いてくださいと勧められながらも、なかなかまとまらず、途中であきらめていました。しかし、「主より与えて頂いたタラント」であ

ると示され、神様に感謝、賛美を申し上げたいと思いました。そこで遅れ馳せながら、今回ペンをとらせていただきました。

わたしは物心ついた頃から劣等感のかたまりでした。家は農家でしたので、若い頃から早朝より母と草刈に行っていました。父は昔風の頑固な人でしたが、子煩悩でもありました。そのためわたしを気にかけて、農業で身を立てるように、よく手伝わされました。しかし今ではなつかしい思い出です。ある時、腰の痛みを覚え、土手に腰を下ろし、空を見上げると、ふと、「このどこまでも続く青く高い空は、いったい誰が造ったのだろうか」と思いました。そしてしばらく立ちすくんで、空を見ていました。家は仏教の家庭でしたので、本当の神様だとは知るよしもありませんでした。

そのような中で、昭和三四年ごろ、大阪の丸山兄宅に兄のお母さんと行くようになり、そしてそのことが主の救いに導かれるきっかけとなりました。その後、いとこの紹介で、福岡へ家事手伝いとして行くようになり、前田教会へ導かれ、榎本先生を通して導いていただきました。今にいたるまでの愛の労をいただき、感謝しています。

都城に戻ってきてからも、大阪の姉より大、小の聖書を送られ、手紙に集会がいつ持たれるかわからないから大事にし

ておくようにといわれました。しかしその時も不信仰で、正直、こんなところでどうしてと思ったのですが、「なんじの信仰のようになれり」と神様のあわれみにより、集会が一昨年の一〇月よりこの地（都城）で持たれるようになり、月に一度の都城集会となりました。毎月、主にある交わりを与えられ、これで良いのだろうかと思いつつ、感謝しつつ、祈り、集会に集わせて頂いております。

「主に感謝せよ、主は恵みふかく、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。」（詩篇一一八篇一節）

「数えてみよ、主の恵み」（聖歌五九四）

「あふれるばかり、感謝しなさい。」（コロサイ二章七節）

「苦しみにあつたことはわたしに良いことです。これによつて、わたしはあなたのおきてを学ぶことができました。」

（詩篇一一九篇七一節）

神様の御旨をお痛めする不真実な者も、不思議なことですが、その都度、多くの助け人が与えられ、支えられて参りました。特にさまざまの中にありながら、献身的に労をとってくれた友の信仰を見て、その強さ、すばらしさに感動し、今は弱い私も同じように主により頼みつつ歩んでいきたいと願

い求め、ただ祈るのみです。

「わたしはまことのぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とながつておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたはなにひとつできないからである。」（ヨハネ一五章一・五節）

「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい。」（テモテ第二一章八節）

この御言はわたしが疲れて八幡へ伺ったとき、榎本先生より個人伝道をして頂いたときに頂いた御言です。ご多忙の中を優しい愛のまなざしで、静まるべきを過ごさせていただきました。（昭和五八年一月二四日と記録しています。）

今はこちらでも金生先生の早天祈祷会のテープを頂いて、毎朝、御言を頂いています。今朝早朝静まって祈るとき、改めて同じ御言を与えられました。わたしの今の心境とびつたりで、感謝、感動、感涙を覚え、アーメン、アーメンと、後は言葉になりませんでした。

「神がわたしたちに下さったのは、臆する霊ではなく、力と愛と慎みの霊なのである。」「だからあなたはわたしたちの主の証しをすることや、わたしが主の囚人であることを、決してはずかしく思ってはならない。むしろ神の力にささえられ、福音のためにわたしと苦しみを共にしてほしい。神はわたしたちを救い、聖なる招きをもって、召してくださいだったのである。」(テモテ第二 一章七・九節より)

こうしてペンを取ると、次々と若い日のことまで思い浮かんでいきます。都城へ戻るときも、最後に青年会の皆さんが送別会を予定して下さっていたにもかかわらず、小心者のため、勇気がなく、すっぱかしてしまいました。今、その時頂いた、お一人お一人の聖句入りのアルバム帳を改めて拝見し、申し訳なく思っております。このような者のため、今日までお祈り頂き、ありがとうございます。「神は人を創造された」、あなたを造られた、との寄せ書きが今身にしてみています。

「わたしの恵みはあなたに対して十分である。
わたしの力は弱いところに完全にあらわれる。」

(コリント第二 一 二章九節)

「いまにいたるこそ 主のめぐみなれ
まもりのみ手をば などもたがふべき
いかなるおりにも 愛なる神は
すべてのことをば よきになしたまふ」

(霊感賦二六番)

主の恵みを感謝します。

二〇〇〇年一月二四日



主人の思い出

丸山 恵美子（都城）

『万物は神からいで、神によって成り、神に帰するのである。』
『あなたがたがわたしを選んだのではない、わたしがあなたがたを選んだのである。』

主人は昭和五年九月一五日、鹿児島島の隼人に生まれました。そして小学校五年の頃に、父が病弱であったため、祖父母共に母の故郷である都城へ引越してきたそうです。兄嫁の話では、姉二人、兄弟三人の中で、一番明るくゆかいな子だったそうですが、修行に入り、二年くらいして帰ってきた時には別人のようになっていたそうです。そして都城高等科二年のときに、海軍を志願しました。出征まもなく敗戦となり、帰郷したものの、学校にも帰れず、向学心に燃えながらも、母子家庭のため、それもままならず、あちこち仕事の手伝いをしていました。そんなときに、近くに住む叔父のすすめで、大工の弟子入りとして八幡の地へと移り住みました。

終戦後の食糧難、就職難の時で、多くの先輩たちの中に弟子入りし、朝食当番など、なれない仕事もしたそうです。自分はそのがいやだったのですが、二、三人の人が喜んでし

ているのをみて、不思議に思ったそうです。後で判ったことですが、ご飯が出来る前にメリケン粉だんごを作り、ご飯の上で蒸し、皆が起きる前に食べていたそうです。

この師匠は温和で、面倒見のいい人でした。食糧難の中、食べ盛りの若者たちをよく世話して下さったそうです。しかし酒が入りますと、夜中に皆起こされ、一時二時まで説教が続いたそうです。誰一人、口答えする人もなく、また答えないことがさらに師匠のストレスとなりました。毎日がそのような状況ですから、仕事から帰り、食事、洗濯、そしてやぶれたズボンのつくりです。慣れないため、やっと済んだと思ってみると、ズボンの前後を縫い付けていたりして、やっと済ませて眠るのは十二時ごろでした。一休みすると、すぐに起こされ、そのため製図（通信講座）の勉強もままならず、いつも締め切りには間に合いませんでした。弟子修行を終えたら、大阪に出て、夜学にと希望を持っていましたが、たくさんいた先輩たちも仕事が少し出来るようになると、一人一人と出て行き、最後は主人だけ一人残ってしまいました。自分は父親がいなかったため、自分を子供のように世話してくれている、愛すればこそいやなこととも言ってくれと、師匠ご夫妻にはいつも感謝していました。

しかし、肉なる生活を憂いながら、「人生とは何ぞや」と悩

み、苦しみの中「人生苦の解決」「ゲート」「トルストイ」や美術の本など、月々の小遣いはほとんど古本に消えてしまいました。それは結婚したとき、貴方の両親に雪夫さんは何も持っていないねと言われたら、本を見てくださいと言いなさいと、師匠の奥さんに言われる程でした。何とか心の平安を得たいと、あちこち宗教を求めて、たずね廻っていました。

ある時、鹿児島小学校の先生が、小倉の高専の教師をしておられる事を知り、幾晩も人生相談に行きましたが、答えは出ない、そのような中で、聖書に出会い、「汝の敵を愛せよ」との御言葉に感動し、キリスト教は素晴らしいと思ったそうです。そうして、五年の年期も終えて、やがて自由に勉強できると大阪への夢を見て、母親に相談したところ、叔父から早速呼び出されました。勉強はいつでもできる、結婚が先だと勧められました。「まだよちよち歩きの裸一貫だ」と断つても、叔父は聞き入れず、私宅にも足しげく来られました。

強引とも思われる程の薦めで、結婚となりました。主人も不安だったと思います。私も全く知らない、どんより曇ったような八幡駅に降り立った時はとても不安で、淋しさを感じました。住居は師匠宅に与えられましたが、職人の方、弟子の方々の同居で、たたみ二畳が新婚生活の始まりでした。なれない田舎者の私のことゆえ、とまどうことばかりで、よ

く主人の帰りを待つようにして愚痴をつぶやきました。自分も疲れているだろうに、私の話を聞きながら、決して私の話には同調せず、さとするのです。そう言われれば、そうかなあと思われ、主人は偉いなあと思ったものです。今になって、その言葉は聖書の言葉だったのだと知るので、このように目しい耳しいに等しいような者を道連れに、よく耐えてくれた、私の良き伝道者でした。

世帯を持つてからは、賀川豊彦先生の説教などを聞きに連れて行ってくれました。会場は満員で、一番後で立ち見で黒板に何か書かれるのですが、何の事だかさっぱりわからないままでした。このような無知な者を長年の間、連れそつてくれたものだとしみじみすまなく、おそまきながら、悔い改めさせられます。天に召されてはや二年余り、何もかもなつかしく嬉しい、良い思い出となり、日を追うごとに美しくよみがえります。この出会いがなかったら、今日の日はありません。すべて主の御手のうちにあった事を思い、身に余る祝福です。

振り返れば、すべて主の導きでした。師匠宅から六田へ移り、そこでクリスチャンとの出会い、そして七条に移らせていただきました。その頃、職人は一日・十六日が休日でしたので、日曜礼拝には出席できませんでした。そこで、主人は

一人で近くのナザレン教会の伝道会に行くようになりました。その頃の私は主人が教会に行っても、何も感じることなく、また淋しいとも思わないし、まったくかわきはありませんでした。その後仕事現場が変わる度に、前田教会の近くへと引越すことになり、クリスチャンの友（六田のアパートにおいて）を通し、礼拝の民と交えられました。

高陽建設の仕事も一段落しているところに尼崎の友人から仕事の依頼がありました。主人は「自分が行く」と言って、翌日一人で行ってしまいました。そして私は後の支払いなど済ませて来いと言われました。私は旅行など不得手でしたが、一月後に、ちょうど田平恵子さんのご主人が東京へ出張になり、旅なれない私を尼崎まで連れて行ってください、助かりました。

それからは、昼間は仕事、夕方から学校へと、多忙な生活が始まりました。人間の力には限度があります。とうとう病に倒れ、仕事が出来なくなりました。幸い入院はしませんでしたので、体に無理のない仕事を探し、勤めているうち体調も少しずつ良くなりました。そんな中、主人の母と私の妹が、共に悩みをもって都城より出てきました（昭和三四年の頃です）。ちょうど、住居は町内全域引越しのうわさの中であわてふためく時でしたが、主の御手に守られ、やがて大阪南

区の北工務店に就職、現場監督として勤めるようになりました。

しかし大阪に出てまもなくすると、大阪万博の準備のため、職人不足の時を迎えました。そこで社長から、「丸山さん、もう一度現場に戻ってくれませんか、もし体に無理なようなら、また事務所に帰って下さい」とのことです。再度大工を始めました。それは、中宮の家主、中島様の仕事だったのです。ご主人が亡くなられて三年、生活のためにと、六軒店舗の住宅を建てられることになり、その仕事を引き受けました。そこはご主人が生前たくさんの人を使って商売しておられたとのこと、その事務所が私どもの仮住まいとなりました。住宅難の時で、近所の方々が借りにいかれても、なかなか貸してもらえず、私が商店街に買い物に行きますと、お宅は親戚だそうですねとよく言われました。私共は信用できなくても、私共がクリスチャンである事で安心して、それから二十余年親子以上の交わりをさせていただいています。都城に引き揚げてもお出でいただき、今でも、又是非大阪に来て下さいとのお便りを頂きます。「われ行わば、誰がこれをとどむること得んや。」の御言葉のとおりです。

尼崎住宅引越しのうわさの中、一足先に大阪へと導かれ、愛する兄弟姉妹方と出逢い、主にある交わりの場となりまし

た。そして夜学の友や故郷から仕事を求めて来られる方々の救いの家となりました。最初は一人で来られますが、四、五年もすると、家族も呼んで、建売住宅に引越されます。そして一週間もすると、次の方が次々と新しい方々が来られ、新しい方々との生活となりました。いつもたくさんの方々の生活でした。さまざまな事がございましたが、三百坪の堀の中、何事がおこっても誰も知らないような状況でした。しかし、「人は知らねど、主は知り給う。」離婚寸前の方々がいたり、夜中の二時、榎本先生に電話して泣き付いたことや、火事にあつたこともあります。救急車に乗ったり、新聞にも載ったり、また警察（交通事故等々）や消防署にも呼ばれたりしましたが、その中も不思議なように、優しく慰められました。あわてふためくその時も、主は共におられたのですね。「災い転じて益となさん。」「主は善にして善をなし給う。」すべて主のご計画があつたのですね。目しいであつた者は今、知るのです。

不信仰ゆえに、見ゆる状態に振り廻され、心騒ぐ時、はじめて行つた前田教会で涙があふれて、主に感謝した思いが、いやましにつのります。主人は「おまえは月一回前田教会に帰って来いよ」と言ってくれますが、そのような余裕などなく、ぐちとつぶやきの便りなど榎本先生に書き送りました。

その都度、聖言説教、後にはテープを送っていただきました。そして先生が東京、大阪へ御用でお出でになるときなど、私宅にも寄つて頂き、お祈り、説教と、まるで夢のようでした。ある時、榎本先生から「アブラハムの信仰が与えられるように」とのお手紙を頂きました。アブラハムが、土地の名前か人の名前か、わからなかった者でしたが、本当に私共が救われるために、どれほどの犠牲がはらわれ、どれほどの篤きお祈りに支えられてきたことでしょうか。「静まりて、わたしこそ神であることを知れ」とおりです。

主人が召されて、早二年余り、今やつと我にかえたように、何もかも鮮やかに思い出され、すべて尊い主の御手にあつた事、しみじみと身にしてみえます。すべてが造られた者、一人一人が主を感謝讚美するために生かされて、そして使命終えなば御国へ帰らせて頂くという、何と幸いな人生に入れて頂いた事でしよう。不信仰ゆえに悩み苦しみました。が、「何事も思い煩つてはならない。ただことごとく感謝をもつて祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安があなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあつて守るのであろう。」との御言葉を大阪中宮在住の時に頂きました。炊事場で用事している時示された聖言、

ハッ！と手をとめ、聖書のどこにあるかも判らずに探しました。見つけ出した時の嬉しさは今でも思い出します。下着を取ろうとする者には上着をも与えなさいとの聖言が次々と示され、思いにもまして与えてくださる神様を実感し、その時の喜び、日々の生活の中で聖言に支えられました。

自分は大工には向いていないと悩み苦しんだ主人も未熟ながら、尊い御用に用いていただきました。会堂建築も予算未定の中での建築でしたが、主はひとつひとつあわれんで守り支えていただきました。それは不信仰な私共が、主は生きて今も働いて、いやしい者と共にある事を知り、信ずるためでした。教会の皆様にお会いした時、皆様お一人一人が先生に見えました。そして自由自在に教会に集えて、うらやましくさえ思えました。主にありての楽しいお交わりでした。そして主になればこそ取るに足りない者達も、皆様の篤きお祈りに支えられ、今日があります。そして若き日、悩み苦しまれた方々も、今は可愛い子供や可愛い孫たちと共に、楽しい日々を送っておられる事でしょう。陰ながら祈りつつ、なつかしんでおります。思い出と証しはつきません。今もさまざま問題の中ですが、あの時も、こんな時も、不可能と思えた事も、主は御旨をなして下さいました。今も又、主の御栄光の現れるためと、感謝して、主のお働きを待ち望んで祈る日々

です。

「もろもろのやからよ、主に帰せよ。」

栄光と力とを主に帰せよ。」(歴代志上一六章二八節)

「しかし神の恵みによって、わたしは今日あるを得ているのである。」(コリント第一一五章一〇節)

早朝から命の糧を頂き、主の御あわれみを感じたいします。



第三ステージ突入の記

正野 真宏（前田）

「しかし、主を待ち望む者は新たな力を得、鷲のように翼を張つてのぼることができる。走つても疲れることなく、歩いて弱まることはない」（イザヤ四十二・三十一）

ステージとは、すなわち舞台である。人生を舞台に譬えるなら、三つのステージに分けることができる。第一のステージは親の保護・養育を受けている時代である。第二のステージは、親から自立して自ら生計を立て、社会・経済活動に参加する一方で家庭を築き、子供を育てていく時代である。第三のステージとは、人生の終章、すなわちこれらのものから解放され、悠悠自適たる生活を送る時代で、概ね六十歳から六十五歳でこの時期を迎える人が多い。

昔は「ご隠居さん」と言われて、尊敬もされていた。余命期間も短かったので、それまでの生き方をそう変える必要もなく、それなりの役割も与えられて、惜しまれながら生涯を終えることが多かった。ところが近年の平均寿命の伸びによつて誰でも長生きできる時代となり、長生きだけで尊敬される時代ではなくなつた。七十歳も今日では「古代稀なり」で

はない。やがて高齢化率が三十%を超えると、巷には高齢者が溢れ、「犬も歩けば、高齢者に当たる」と言う格言ができてくる。「人生八十年」時代を迎え、昔はなかった引退後に二十年という、もう一つの人生のステージが待っている時代になつたのである。

若い若いと思つていた私が、この六月から第三のステージに突入したわけである。勿論、このことは以前から分かつていたことだし、備えてきた積りではあるが、いざその身になつてみると、いささかの戸惑いに出会うこととなつた。

私は、全てのものの束縛から解放放たれることを夢見、その解放感を満喫しようと思つていた。ところがその解放感が私にとって重荷とさえなつてくるのである。確かに何をしようとする自由である。組織に縛られることなく、時間的制約もない。これほどありがたいことはないと思う。ところが一ヶ月もすれば、やろうと思つていたことも概ね終わり、先も見えてくる。当てももされず、やることのないこともつらいものだ。今日は何をしよう？ から始まる。家内のやることを手伝い（下請？）、庭仕事をやっても、趣味を生かすにしても、本業でないようで、今までのような充実感はない。自由過ぎて、かえつて落ち着かず、束縛された時が懐かしくさえなる。

考えて見ると、私はこれまで組織の面倒を見てきたと思つ

ていた。ところが、離れて分かったことは、組織が私の面倒を見てくれていたのである。まず、毎日家を出て行く場が与えられている。これだけでも有り難い。行けば、皆が笑顔をもって受け入れてくれる。そこにはやるべき責任ある仕事がある。私を待っている。決して退屈をするということはない。頭は常に活動的である。仕事の関係で、職場の者や外部の人と会い、会話する。すると情報が入る。情報が入ると、活動の範囲が広がり、更なるチャレンジとなる。このようなやりがいや充実感だけでなく、冬は暖房、夏は冷房が備えられ、お茶まで出してくれる。その上に給料までもらえるのである。こんなありがたいことはない。確かに、制約はある。〇〇しなければならぬという重荷と強制は間違いなくある。しかし、それすらも、私に生活のリズムを与え、目標を与えてくれたのだ。

今、そのような生活から解放、というより、わが意に反して、定年制という名のもとに強制的に引退させられ、誰からも面倒を見てもらえなくなってしまう。何もかも、自分でやらねばならない。さて何をどうするかという戸惑いである。

それまで、私の周りには多くの人がいて、私の働きを賞賛した。しかし、今は、私と一緒にいた仲間はおらず、私に期待して、呼び掛けてくれる人は一人もいなくなつた。まるで、

映画「ライムライト」でチャップリンが演じる、華やかなスターの座から降ろされ、お呼びのかからなくなった、落ちぶれた役者のように、孤独を味わい、目標を見失って戸惑っている自分を見出したのである。この有り余る時間、二十年という第三のステージをどう生きていけばよいのだ！こんな生活が死ぬまで続くのかと思うと、うんざりする。このままでは、無気力な人間、濡れ落ち葉に成り下がってしまうのではないか。それが怖い。

そういう時の標記の御言葉である。

偉そうなことを言っても、要は自立していかないのである。組織や人から面倒を見てもらわないと生きて行けない人間だということである。第三のステージとは、組織や人に依存せず、また支配されず、自立した一人の人間として、堂々と生きていくことに他ならない。その力はどこからくるか。我々の内からは湧いてはこない。主を待ち望み、主に信頼している時、主が力を与えてくださると言うのである。

これまでは主に信頼すると言いながら、自らの力や経験、更に組織を頼むところがなきにしもあらず、だったと思う。また、何かをすることで生きがいや生きる力を得ていた部分があったのではないか。今、それらのものが全部なくなつた

ということとは、ただ主にのみ信頼していく生涯へ導かれたということである。現役時代は、仕事を通じて主に仕えてきた。そして今日まで主は確かに導いてくださった。それはそれでよい。しかし、これからは何かをすることで生きがいを得るのではない。自分からは何もしない、何も持たない、ただすべてを捧げ、主にのみ仕えていく、自分の計画ではなく、一足一足を主に導かれていく生涯である。ぶどうの枝は、幹につながることで生きることであり、働きも、生きがいも、実を結ぶことも全部その中にあるのと同じである。それは聖霊に満たされた生涯であろう。

実は退職前に、ある所から、私のこれまでの知識と経験を見込んでくれて、ぜひ来て欲しいという要請があり、行く積りでいたが、直前になってそれがご破算になってしまった。

もしあのまま、働きに行っていたら、私は今までどおりの考え方で第三ステージを過ごしたであろう。しかし、ヨブではないが、神様から当てにしていたものを取り去られ丸裸にされて、真剣に祈らざるを得なかった。そこでアブラハムの信仰を示され、「あなたが宝としている知識・経験、社会的評価を神に捧げなさい」と迫られた。私は、自分のものは何もないこと、私自身も主のものであり、主によって生かされる者であることを悟らされたのである。

第三ステージ突入を機に、主は私に干渉してくださり、このような信仰とビジョンを与えてくださった。

そういう意味では、これからが本当の人生なのかも知れない。それは、私にとつて新しいチャレンジでもあるわけだ。

老人という言葉は、古い衰えた人というイメージがあつて、一般的に忌み嫌うが、中国では、老と言う字は「達する」という意味で、老人とはすなわち達人であるということを表す。実に我々第三ステージにあるクリスチャンは、人生の真の達人とならなければならぬ。ご隠居ではいけないのだ。

聖書の中には、先人たちの生きた見本が多くある。

「ヤコブは死の間際に、ヨセフの子らを一人ひとり祝福し、そしてその杖に寄りかかつて礼拝した」(ヘブル十一・二十一)とある。そこに、知力・体力が衰えてもなお神の前に歩もうとするヤコブの凜とした信仰の姿勢を見ることが出来る。

また、老境のパウロは、「わたしはどんな境遇にあつても、足ることを学んだ。わたしは貧に処する道を知っており、富における道も知っている」(ピリピ四・十一)と言ひ、さらに「わたしは世を去るべき時はきた。わたしは戦いを立派に戦い抜き、走るべき行程を走り尽くし、信仰を守り通した。今や義の冠がわたしを待っているばかりである」(テモテ第二四・六く八)と言うことができた。

ああ、何と言う光荣ある生涯であろうか。このような終章を送ることができれば、最高の幸せである。勿論、長い間の自己中心の習性があり、弱さを持っている。まだ、使命も分からない。それゆえ、いよいよ主を待ち望んでいかなければならないと思っている。

交通事故顛末記

正野 眞宏(前田)

この度、私は人身事故を起こしました。その顛末を私の兄弟にその都度報告し、祈ってもらっていましたので、それをそのまま掲載し、皆様に報告したいと思えます。

第一報(事故発生)

主の御名を賛美します。暑さの中も、主の恵みのうちにお過ごしのことと思えます。

さて、本日はつい先日、我家に起こりし出来事を書き連ね、近況報告とします。

時は平成十一年七月三十一日(土)、私はいつものとおりに

会の掃除に行こうと、八時五十五分、車で家を出ました。途中渋滞があり、時間に遅れそうになったので、少し急がねばと思つたことが伏線となりました。八幡西区熊西の交差点で、信号が黄色に変わったのです。私の前に二台の車が走っていました。当然、その二台はそのまま走って行くだろうと思ひ、私も行けるかどうか、信号に目をやったその瞬間、何と最初の車(運転手は中年の女性でした)が急停車したのです。驚いた後続車は急ブレーキを踏み、危うく衝突を免れて直前に停止できましたが、私は目を逸らした分だけ遅れました。気付いた時はもう目の前で、ブレーキを踏んだものとても間に合わない。とつさにハンドルを右に切って避けようとなりましたが、それも駄目で、前車の右後部に激突、その弾みで玉突きとなり、最前車の軽自動車まで押ししまいました。多分、前車の運転手が怒鳴りこんでくるだろうと身構えていました。なかなか出てきません。見ると、首をうなだれています。これは大変なことになったと、すぐ行って断りを言い、状態を聞くと、頭が痛いと言います。申し訳なきで一杯です。とにかく交通の邪魔ですから、車を脇道に移動してもらい、近くの店から一〇番通報し、警察に来てもらい、救急車で病院に連れていってもらいました。

現場検証に立ち合いましたが、もちろん全面的に私に過失

があります。終わって、病院へ行き、本人と医師に状態を聞いたところ、骨には異常はなく、鞭打ち症で一週間程度安静にしておけば、治まるとのことでしたから、一安心でしたが、この方には糖尿病があり、明日、入院するところだったと言いますから、相当悪いわけで、治療が長期化したり、後遺症が出る恐れがあります。今このために祈っているところです。

もう一つは、この方は五十七歳の小さなガス会社の社員ですが、現在リストラに会っているとのこと、会社を休めばその口実を与えるという心配があるとのことでした。そのことも祈っているところです。

帰りは私の車で自宅まで送りましたが、「起こったことは仕方がない。悪いのは前の車だ。あんな止め方をするものではない。自分も大方ぶつかりそうになった。頭が痛くなかったら、怒鳴り上げるところだった」と言っていました。そうは言っても、やはり悪いのは私ですから、何の関わりのない人にこんな迷惑を掛けてしまつて、本当に申し訳ないといから詫びました。以上が事故の顛末です。

今度のことで二つのことを教えられています。一つは、「心を尽くして主に信頼せよ。自分の知識に頼ってはならない」(箴言三・五)とあるように、確かに私自身、運転に対する過信がありました。運転が上手だからではなく、主が守って

くださっていたから事故がなかっただけのことです。勿論、運転する時は祈っています。けれどもその祈りは習慣的なもので、主の守りなくしては、何一つ出来ないという「心を尽くし」たものではありませんでした。これは運転の問題だけでなく、自分で何かできると思っているところが、心を尽くして主に信頼しない元凶があるのですね。

第二は、祈ってハンドルを握った時だったか、渋滞した時だったか忘れましたが、「今日は事故が起こる」という思いと、言うか、御声があつたと言うか、そんなことがあつたことを思い出しました。今考えると、主が教えてくださったのだと思います。その時、私はわが腕を頼みとし、そんなことは起こるはずがないと否定していたのです。折角、主が忠告してくださったのに、聞くことをしなかった。平氣の平座で、主を無視した信仰のなさ、愚かさを恥じ入っております。主が絶えず語りかけておられる細き御声に耳を傾けることが出来たら、どんなに素晴らしいことでしょう。これからの祈りの課題です。

事故処理が円満に解決するよう、また主が私を導こうとしておられることが全うされるよう、小さき者のためにお祈りください。

平成十一年八月三日

第二報（事故車賠償問題）

主の御名を賛美します。夏の暑さの中、庭の草がやたらと元気を出し、その成敗に苦勞しているこの頃ですが、前回お知らせした事故の続報をします。

ぶつ付けた相手の方は、物分かりの良い人と思っていました。総論と各論では違いますが、事故車の賠償問題でこじれました。私としては保険会社に任せていますから、交渉経過を見守るほかないのですが、事故車の評価額で両者に開きがあり、その差額を私に要求してきたのです。

具体的に言えば、相手の車は昭和六十一年型サニーで、下取り価格はゼロです。そういう車に高い修理代を払うのは無駄ですから、同等の中古車代として保険会社が十五万円払うと言ったのですが、本人は三十五万円を要求して譲りません。廃車直前の車が十五万円で売れたのと同じですから、大儲けと思うのですが、後に誰かについて入れ知恵しているのか、それでは車は買えないと言って、差額を要求しているわけです。彼は「自分はまだ頭が痛くて、会社にも行けず、こんなに苦勞しているのに、あなたは保険会社任せで何もしない。誠意がない。それで良いのか。このままだと第三者を立てて問題にする」と言って、私を責めます。保険会社ともう少し話

し合ってくれと言っても、これ以上の増額の見込みはなく、

話し合うつもりはないと言います。私が、法律的にも保険会社を代理人としており、交渉の表に出ることは出来ないと言っても、何故か、あなたは責任逃れをしているのではないか、誠意がないと言って聞きません（後で分かったことですが、以前に事故を起こした時、かなりの金額を払わされたらしく、加害者も金を出すのが誠意と思いつ込んでいた）。とにかく、相手の直接要求に対して、交渉に当たってもらっている保険会社の手前、口が裂けても金を出すとは言えません。「あなたの言いは、私からも保険会社に伝えますから」と言って、その場を治めますが、二三日置きにかかってくるので、私の心も痛みます。罪を犯した者は、こんなに弱い立場なのかとつくづく思いました。責任を追及されれば、百パーセント私が悪く、何一つ抗弁できないのですから。

私は、ふとイエス様のことを思いました。カヤパの法廷では祭司長たちの不当な訴え、それはイエス様の責任を追及するものでした。抗弁しようと思えば、いくらでも出来たと思います。でもその時のイエス様は、私たちの罪を全部負うておられましたから、何一つ抗弁しませんし、また出来なかつたと思います。「罵られても、罵り返さず、苦しめられても、脅かすことをせず、正しい裁きをなさる方に一切を委ねてお

られた」(ペテロ第1一・二十三)。そして、現実、私たちの罪の報いを十字架の上で受けてくださいました。罪の責めを受けておられるイエス様の悲しみ・痛みの億分の一を味わわせていただいたように思いました。イエス様に比べれば、私は自分が犯した過ちの報いを受けているのですから当然ですし、別に十字架に掛るわけでもありません。敢えて受けていこうと思いました。

相手は私に対する不信感をつのらせ、感情的になって問題がこじれてきました。ただ祈るほかありません。八月十三日の朝のことでした。前夜も電話が掛かり、最後通告だと言ってきたので、そのために祈っていたのですが、ゼカリヤ書で「わたしはその周囲で火の城壁となり、その中で栄光となる」(二・五)が目にとまりました。そうなのだ、私は相手を恐れ、状態を見て心惑わすけれども、主が私の城壁となり、その身に及ばないようにしてくださいとおっしゃるのだから、またエジプトを脱出したイスラエルの民がエジプトの軍隊に追い付かれた時も、主は火の柱をもって近付けないようにされたのだから、何も恐れることも、心配することもないのだった。そう思うと平安になりました。

その日は保険会社が盆休みのため、代理店に状況を説明し、早急な対応をお願いしました。私としては盆明けからだろう

と書いていましたら、保険会社の担当者は休み返上で相手と交渉をしてくれて、打開策を考えてくれたのでしよう、何と今までの倍額で話が付いたとの連絡をその日の夕方受けたのです。主が働いてくださったことを感じ、感謝しました。

引き続き、後遺症の問題についてお祈りください。

平成十一年八月十九日

第三報(病状報告)

主の御名を賛美します。わが犯しし交通事故のためにお祈りいただき、誠にありがとうございます。祈られている者の責務として、状況報告はなすべきのことと思ひ定め、ここに第三報をお送りするものです。

残る大きな問題は、傷害補償問題です。相手の人は糖尿病の影響があるのか、一カ月以上経っても首の痛みが取れず、首に補装具を付けたままで、仕事もできない状態です。このため、会社を九月十日付で首になってしまいました。もともとリストラの対象になっていたとは言え、それが早まったことは事実ですし、私の不注意で、彼は痛みを負ったばかりか、仕事まで失うという羽目に陥らせた責任を感じます。そのことが補償問題にどのように関わってくるのか、保険会社も難しい問題だと言っています。

まずは傷害が早く治ることが先決ですが、どれくらいかかるのか、補償問題が今後どのように展開するのか見当が付きません。彼と連絡を取りたいと思いますが、あまり接触しないほうが良いとの保険会社の忠告もあり（いろいろ要望してくる恐れあり）、それもできないでいます。つまり、先が見えないという不気味さがあるわけです。彼自身も不安一杯でしょうし、治療も再就職も思うように行かなければ、私に対する恨みも増し、どう出てくるのか分かりません。

私としては自分からは手出しはできず、ただ祈るのみですが、主が導いてくださると思う一方で、時として、不安が大波のように押し寄せてきます。まるで、イエス様と一緒に船に乗っておりながら、嵐に会うと大慌てした弟子達と同じで、「信仰薄き者よ、なんぞ恐るや」と言われそうです。今回の事故では、自らの力を頼みとする愚かさ、弱さと信仰の無さを徹底的に示されております。

十九日の礼拝説教はコリント第2四章でしたが、先生が十五節を読んだ時、ハッと気付くものがありました。

「すべてのことはあなたがたの益であつて、恵みがますます多くの人に増し加わるにつれ、感謝が満ち溢れて、神の栄光となるのである」。

そうだった。主の許しがなければ何事も起こらない。主が

許して事故が起こり、この中を通しなされる。ならば、主が責任もって導き、万事を益としてくださる。そして感謝となり、神の栄光となると言われる。私はこの主を見ないで、状態を見ていた。ただ御言葉を信じて、一切を主に委ねていこう。私が苦しいから何とかして欲しいではなく、すべては「主の栄光の現われんためなり」でした。そのことを気付かしていただきました。続いてお祈りください。

平成十一年九月二十三日

第四報（後遺症問題）

「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ」（創世記十七・一）

後遺症問題のその後を報告します。二月末で被害者の治療は終わり、保険会社が補償の交渉に入っておりますが、要求との開きがあつて、またまた難航しています。そして先日、私に直接電話がかかり、強い口調で私が保険会社任せで誠意のないこと、今後は保険会社を相手にせず、直接あなたと交渉する、誠意がなければこの道のプロに任せる、そうすればあなたただでは済まなくなる。それが嫌なら、要求に応えろとそれは脅しに近いものでした。私は、直接交渉は出来ないこと、保険会社と協議するからもう少し待つてほしいとひ

たすら頼むほかありません。

事態はますます悪くなってきました。保険会社にその旨を連絡すると、弁護士に依頼して法的にそれが出来ないようにしましようとのことでしたが、私としては神様によつて解決していただくことを祈っておりますので、それは待つてほしい、まだ私も耐えられるからと頼みました。

そして与えられた御言葉が、上記の御言葉です。この前を読むと、アブラハムが神様から子供を与えると約束されながら、人間的な考えに走り、イシマエルが生まれるという失敗があります。それから十三年後に神の言葉が臨んだわけですが、神様はどうして十三年間も放置されたのだろうかという疑問が湧きました。約束を信じて待つことをしなかったアブラハムを怒って顔を背けておられたのか。私たちも何か失敗した時、このように考えてしまいます。しかし、そうではなく、神様はアブラハムが九十九才になるまで待つておられたのではないか。すなわち「彼自身の体が死んだ状態」(ローマ四・十九)になる必要があった。なぜか。人間、自分の力、肉の元気を持つている間は、どうしてもそれを行使する。事実、彼はそれで失敗をしました。神様は業を行なうのに、人の力を要しない。百パーセントご自分の力で行ない、栄光を現わされる。それ故、彼自身が全く無力な状態になった時(己

に全く死に切った時)、神様はもう一度彼に現われ、「我は全能の神なり」と言われたのだと思います。アブラハムは神の前にひれ伏しました。

そうしてみると、私の場合も同じではないか。状態が悪くなったのも、私が自分の力や保険会社により頼むのではなく、全部、神様の手に委ね切つていくことを求めておられると教えられました。それで、そのように祈りました。

その数日後、保険会社から、被害者があなたに来てくれ(保険会社も同席)と言つていますが、どうしますかとの電話があったので、祈つて行くことにしました。

最初のうちは、厳しい言葉が出ていましたが、私自身、この人に多大な迷惑(会社を首になったこと、再就職が思う様にかかないこと、借金があつて生活が苦しいこと、後遺症も出ていること)をかけたことは事実ですし、保険会社からの慰謝料だけのこと済むものではないということを自覚していますので、相手の言うことをそのまま受け入れていきました。もし百叩きで気が済むなら、それも受けようという気持ちでした。そういう私の気持ちも伝わったのでしょうか。だんだん表情も穏やかになり、今日来てくれてよかつたと言つてくれました。神様が働いてくださったと思います。結論的には、後遺症の認定状況によつて、もう一度話し合うということに

なり、まだ解決したわけではありませんが、手ほどの雲が見えるようになりました。犠牲も大きいですが、恵みも計り知れないものがあります。

平成十二年四月六日

第五報（全面解決）

主の御名を賛美します。暖かな日差しが眩しい、青葉の季節となりました。

さて、今日はいれしい報告をします。先日の手紙で、手ほどの雲が見えるようになりましてと書きましたが、神様は急転直下の解決を与えてくださいました。

四月十七日、本人から直接職場に電話かかり、「本日、示談書に判を押しました。いろいろご迷惑をおかけして済みませんでした。予想以上の後遺症に対する補償金が出て、有り難く思っています。これで何とかやっつけていきます（借金の支払？）。自分は小さい者で、あなたに迷惑を掛けました（何度も脅しの電話を掛けたこと？）」と、それはそれは低姿勢です。本人の状態は、右手の薬指と小指に力が入らず、職業訓練校入学テストの時も、ハンマーを握って振ったところが手から抜けてしまって不合格になったことがあり、それがまた私に対する攻撃材料となっていたのですが、日常生活に特に支

障があるわけではなく、認定されても最低の十四級だろう（よく研究している）、それが出ればそれ以上は要求しないが、もし認定されなければ、あなたにその分を支払ってもらおうと言っていたわけです。

後遺症認定は、公正を期すために第三者機関が行うので、保険会社もどうすることも出来ないと言っていました。結果は十二級が出たのです。これだと本人要求額より約三倍の補償金が出ることになり、本人は一も二もなく、示談書に判を押したわけです。すべては神様の導きでした。

私は、彼からひどい事を言われたことは（彼はそれを氣にしたのでしようが）、何一つ恨みに思いませんでした。否、かえって感謝したい気持ちでした。彼から追い詰められたからこそ、私は神様の懐に逃れることが出来たのですし、一切を神様に委ねる秘訣を学び、今、大いなる神様の御栄えを見ることが出来たのです。

彼から責められた時、「罵られて罵り返さず」の精神で何一つ反抗せず、神の全能のもとに自らを低くしておりましたが、神様は「時いたらば、汝を高うせん」とあるように、文字通り相手の方が頭を下げてきて、私に勝利を与えてくださいました。まことに主は、信頼する者を恥ずかしめ給わない方です。

今度のことは、私の不注意から起こったことですが、私は何の損失を被ることなく、かえって、神様の恵みを沢山いただきました。神様の豊かさを賛美するのみです。

皆さんに祈っていただけで、ありがとうございました。お陰様で、「これにて、一件落着！」でござりまする。

平成十二年四月十八日



わが恩恵なんじに足れり

高木 ツルエ（前田）

私は平成六年八月頃から左目の奥に膜が張って視力が自然に弱くなる症状で、産医大の眼科に通院していました。平成七年十一月の診察の際、眼科の教授から、網膜の上に薄い膜が張っているため視力が衰えていく網膜前繊維症（網膜上膜）という病気であること、視力が今より弱くなればその膜を剥ぎ取る手術が必要になること、手術は膜の部位が眼の奥なので大手術になること、今後は経過観察が必要なので六ヶ月毎に必ず診察を受けることなどの説明や指示がありました。

「万物は神からいで、神によつて成り、神に帰するのである。栄光がとこしえに神にあるように」（ローマ一・二三六）そんな中で、このお言葉を与えられ、信頼しては祈り、神様の御手に委ねて、六ヶ月毎の検診を受けていました。そして、平成十一年六月の検診の際にも六カ月後の十二月には必ず受診するようと言われましたが、十二月はクリスマスや年末で落ち着かないので、十一月の九日に受診に行きました。すると、網膜上膜の病気のほかに白内障もおこしているとのこと、病状や今後の治療などの詳しいことは来週十六日に家族を含めて説明するとの話がありました。当日、西岡と共

に主治医から、これまで視力が〇・五で安定していたので、

経過観察をしてきたが、今は〇・三まで落ちてきていること、網膜上膜の手術と白内障の手術を別に行うことも可能だが、同時に言うほうが良いこと、同時に行うとすれば、全身麻酔で手術することになること、手術の時期は六カ月後では更に視力の低下が進む恐れがあるので、できたら三カ月以内に行う方が良いことなどの説明を受けました。そして、手術するかどうか、網膜上膜と白内障の手術を同時に行うかどうかについて、十二月七日までに決めて下さいと言われました。

発病以来、神様の助けと導きを祈り求めて信頼してまいりましたが、いざ手術となると心の騒ぐのを覚え、信仰のない私を助けて下さいと神様の憐れみにすがって祈り求めました。柘植先生が「あるようでないのが信仰、ないようであるのが罪である」と言われたことを榎本先生からお聞きしましたが、まさに今の私の信仰状態ではないだろうかと示され、

「知の果てなるもろもの人よ、わたしを仰ぎ望め、そうすれば救われる。わたしは神であって、ほかに神はないからだ」
(イザヤ四五二二)

とのお言葉によって、信仰に立ち直らせていただきました。

それから、早速、牧師館にお伺いして、榎本先生に眼の手術のためのお祈りをお願いいたしました。

先生は、

「今より我は主なり、われおこなわばたれかとどむることを得んや」
(イザヤ四三・一二)

と力強いお言葉で祈って下さり、私も信仰を与えられて、二月十七日産医大に入院いたしました。入院してから多くの検査を受け、手術は二月二三日の午後になりました。二月二一日の夜には主治医と執刀医から手術についての詳しい説明を家族と共に聞きました。手術は網膜上膜のみを局所麻酔で行うとのこと。それと、ごくごく稀であるが、手術中に網膜剥離をおこすことがあるので、そのことも承知しておいて下さいとのことでした。

当日、手術は網膜上膜をゆっくり剥がし、九〇分で終わる予定でしたが、始めてみると何と、網膜剥離をおこしていたのです。執刀医が剥離の原因となる網膜の穴を必死にくら探しても見つかりませんでした。結局、局所麻酔のため、これ以上時間をかけられないので、とりあえず手術をそこで終えて縫合することとし、翌日まで様子を見ることになりました。私も手術中お祈りしながら、どのようになっても神様の御手にゆだねようと信仰を与えていただきましたので感謝でした。執刀医から特に今晚は左眼を下にして、絶対安静にして休むように指示を受けて病室に帰りました。

翌日の検査では網膜剥離はおさまっているが、なおしばらく安静にした方が良いとのことで、ベッドで折りながら静まっています。網膜剥離はおさまりましたが、術後には微熱が出て、なかなか下がりませんでした。また、血液検査を二回受けましたが、目に炎症は見られませんでした。執刀医は、この微熱がおさまったら、今度は全身麻酔で予定の手術をしようねと言つて下さったのですが、私が手術のために榎本先生にお祈りしていただいた時与えられたお言葉がイザヤ四三・一三でしたので、神様が網膜剥離をおこし、また何の手も加えないで癒して下さっている事実を思えば、予定の手術は神様が止めておられるのではないだろうかと示されては折り、神様どうしたら良いのでしょうか、教えて下さいと眠れないまま祈りつづけました。その時

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。」
(ヨハネ一四・一)

とご自身をあらわして下さり、また、創世記一七・一
「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ(信頼しなさい)」のお声をかけて下さいましたので、そうだ、このことも全て全能者なる主の御手にゆだねようと信仰を与えられ、心に平安が臨み、眠ることができました。そして、これから神様がどのように導かれるか、私に

は分かりませんが、神様が示して下さいる道に心をかたむけて信頼していこうと心に決めました。

三月に入り、私と同日に手術を受けた同室の方々もそれぞれ退院日が決まっていくなか、私の微熱は続いていました。

主治医からは、「高木さんも退院したら環境も変わるので、微熱もおさまると思いますよ。目の方は異常はないし、退院の前に抜糸しますから大丈夫ですよ。それに手術待ちの患者もいるので、三月五日の午後にも退院して下さいると良いのですが。」と言われましたが、退院することについては神様の導きが分ならず不安でした。榎本先生にお祈りしていただきましたご都合をお伺いしましたところ、先生が金生先生と一緒ににお出で下さって、全能者なる神様の御手にゆだねましようとお祈りして下さいました。私も神様が最善になして下さいると信じ、三月五日に退院しました。

久しぶりのわが家では家族が祈って迎えてくれました。夜、静まって、入院以来のことを振り返ってみますと、神様は手術を通して私の信仰をととのえて下さったのだとしみじみ感謝しました。まず、神様の一方的な御愛に対し、私の不信仰、不真実について目をひらいて下さり、更に救い主イエス様の十字架のおんあがないの恵みに慣れてしまっていることなど、神様の前に心から悔い改めました。

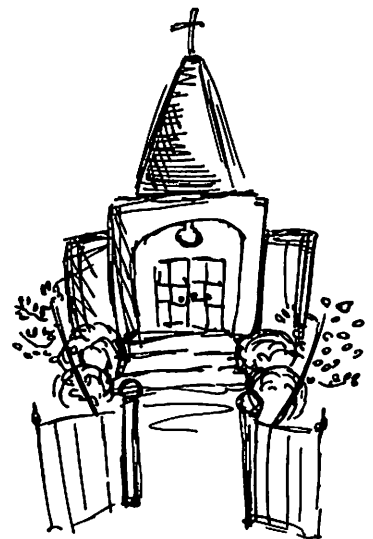
退院後は眼科から第一内科に変わり、さまざまの検査を受けましたが、異常はなく、微熱もここまで下げていただき、強められ、今日までどんなに神様の恵みのうちに守られてきたかを改めて感謝しました。いよいよ心を低くして、神様の計り知ることのできない御愛にお応えしてまいりたいと願います。そして、主よ、今わたしは何を待ち望みましょう。わたしの望みはあなたにありますと神様のみに信頼し、恵みを数えつつ、信仰生涯を全うさせていただきたいと祈っています。

お祈りいただきました榎本先生ご夫妻、金生先生に心から感謝申し上げます。また、主にある皆様方のお祈りを感謝いたします。

わが恩恵^{めぐみ}なんじに足れり、わが能力^{ちから}は弱きうちに全うせられるればなり

コリント第二 一二・九

平成十二年八月六日



聖地訪問の旅に導かれて

川越 シズエ（前田）

三月二十五日夜、大阪に住む川越正（二男）から、聖地訪問の話があり、参加できたらと思いい、一応話しを進めたいと思っていると連絡がありました。そして「とにかく身に気をつけて、足腰を鍛えておくように。六月三日が出発だから、二ヶ月位の間、余計な事を考えず、元気で過ごすように、そして出発前、早めに大阪へ来るように」とのことでした。急な話なのでびっくりして、返事もすぐには出ませんでした。思いもよらない話には私に行けるとは思ったこともなく、ただ出来るなら連れて行ってもらいたい、そんな気持ちでもありました。「行って面倒をかけては」と考えたり、また色々さ

ざま私達の廻り事ども長男のけがなどがあり、一層悩みましたが、いつもの災いの中にあつて、主は善にして善をなし給う主を仰ぎ望んで祈りました。そして、「主は助け給う」と願い求めて信じておりました。

家の者とも話し合い、行けるように頼みました。大阪では千恵子さんが私に必要な品物を据えて待つていてくれました。本当にもつたいなく、感謝でした。

そして六月三日正午、関西空港から飛び立ち、途中乗り継いで十五時間、そしてイスラエル空港に無事に着き、すべて神に感謝しました。入国の手続きも終わり、ホテルに着いたのが四日の一時半頃でした。疲れもあつて、眠れませんでした。

四日からはいよいよバスで聖地を廻りました。私達日本からのツアーは二〇人くらいで、若い人が六人、外は七〇代前後で、私一人八〇を越えておりました。奈良、福岡から参加された男性が二人は私と同年代で、うれしく、親しみを感じました。彼らは若い時から知り合いで仲良く、廻っておられました。二〇〇〇年のためだいたい時とあつて、大変な人で、動きがとれない所もありました。教会も何ヶ所も廻り、いづれどこも説明出来ないのですが、四日午後、ガリラヤの海辺に行きました。しばらく楽しみ、そして近くにある公園でイ

エス様とペテロの話し合いをされる場所で、色々な話を聞きました。その所の教会はさかなの教会とかで、魚の絵が描かれていました。イエス様が傷つかれ、度々休まれた嘆きの教会も拝見しました。どの教会も大きく、敷地も驚くほど広く、石造りでびっくりするばかりでした。教会の裏の方は木陰で涼しく、そこで讚美歌三二番を歌いました。終わってから、周りにおられた外国の人達が拍手しておられて、主にある慶びを感じました。

日本に木造家屋が多いように、この国は石の国と言われます。町々も石造り家屋で、バスで走る所は車が走る所だけ舗装されていて、廻りは荒野で石ばかりでした。バスで走りながら、岩かげに人の立っているような形があり、「あれはロトの妻がうしろを振り向いた塩の柱だ」と聞かされました。バスは走りながら他にも、「あれはマリヤ様が生まれ育たれた村だ」などと説明がありました。走りながらでは遠くて、はつきりわかりませんでした。又、ある小高い所に上った時、ルカ一五章にある放蕩息子が食べるものがなくて食べた豚のえさであるいなご豆の木も見ました。大きな木に五センチ位中に豆が入っているそうで、聖書に書かれているあの言葉を思いながら見ました。イエス様の通られた道は狭く、傷ついて歩かれ、所を歩いて身が引きしまる想いでした。

イエス様のお生まれになった場所から、いろいろと拝見しました。ダビデ王様のひつぎも拝見しました。そのすぐ近くにはマリヤ様の亡くなられた場所であると書いてありました。いよいよゴルゴダの丘は急な高い所で、たくさんな人でとても大変でしたが、この尊い地を歩かれる感激でした。

今はイスラエルが近くになったような気持ちです。生のある限り、主によって日々を大事に従いたいものでありたいと思っています。七日間の旅もすべて主なる神の支え、助けがありましたことと信じて感謝しております。

十日の午前中、関西空港に着き、行き帰り三〇時間、長い時を無事守って頂き、感謝でした。そしてお昼過ぎ、息子の家に帰り着き、一同で感謝しました。私はそれから気がゆるんだのか、二日間休んでしまいました。

そして一三日、一四日の二日間を四国の津田教会水村光義先生のお宅に水村のお母さんに案内されて参りました。大阪の梅田からバスで四国に向かい、夕方に着きました。迎えに先生がご家族で来て下さり、まず温泉に連れて行って下さいましたので、旅の疲れもとれました。そして夕食もその所でいただきました。この土地は温泉が多いところだそうで、町よりちよつと離れていたのですが、帰る前にもう一度、温泉に連れて行っていただきました。町もきれいで、便利など

ころのようでした。先生ご家族のみなさん、孫の直樹も元気であることを感謝いたしました。先生もお忙しい中、いろいろお世話になり、十五日午後、高松駅から小倉まで無事に帰りました。

こうして二週間に及ぶ旅も無事に我が家に帰る恵みの旅でした。さまざまなかをも善にして善をなし給う主を仰ぎ望み、一日一日を大事に聖言を信じ、祈りつつすごして参ります。神様、素晴らしい時を与えて、お送り下さいましたお恵みに感謝致します。

アアメン



手紙

榎本先生机下

聖名を崇め奉ります。

初夏梅雨で降雨がちで御座いますが、皆々様には、御恵みのもとといよいよ益々御健勝およろこび申上げます。降って私方もかねてお祈り下さいまして、私共老夫婦とも至つて無事にして居りますので、他事乍ら御休心下さいませ願ひ致します。家内も寝たきりとは申しますが、病氣らしい事も無く、只老化作用で足が不自由のためと思ひます。中風の後遺症とでも申しましようか、かねてのお祈りに答えられて腦の方は健在の様で、誠に感謝の中で御座います。

私はおかげ様で只今九九才で御座います。此の地方金山校区（金山団地、松山団地）では私は最長寿者です。私の次には九七才に女性が三人居ます。我校区で毎年九月一五日、敬老の日に敬老祝賀会があります。七〇才以上で、九〇才台が九人、八〇才台が九一人、七〇才台が三五〇人位です（毎年の老人会名簿による）。

先般私共の保健所の職員が当校区の老人のために老人病予防のための集会を開いてくれました。此度は老人ボケ防止を

テーマとしてでした。防止方法として、第一が感謝感激、第二、読み書き・ソロバン、第三、笑う事。私は直感で聖書を読むのが第一にあると思ひました。出エジプト記二三章二五節「あなたに神、主にのみ仕えなさい。主はあなたのパンと水を祝福して下さい。私（主なる神）はあなたの間から病気を除き去ろう。」主のお約束は必ず其の通りに成ると信じまして感謝致します。私は九九才の高齢に至つて主の御守りで風邪も引かず「主のいくしきみと御恵みがいつも私を追つて来るでしょう。私はいつまでも主の家に住まうでしょう。」（詩篇二三篇六節）

申し遅れました。ほんにささやかな中元の献金をさせて下さいませ。

「千人は汝の左にたおれ、万人は汝の右に死ぬ、されどわざわい汝に至らず。」

右の様な聖句を以前はいつも、興味ある聖句として見ていましたが、少し字句が違うだろうと思ひますし、右の聖句がどこにあつたのか、詩篇か、イザヤ書ではないかと思ひますが、たしかな事がわからずもどかしい思ひです。

もし先生に於かれまして、右の様な聖句にお気付きの事でもありましたら御教示下さるなら誠に私にとっては幸な事と存じます。

檀本先生柩

檀本先生柩
中
祭

雖皇宗の奉事。

初皇極雨之降而「ちて」西老、昔亦皆「孫」は出雲守のり

念之、益之、少健祥、亦亦、中、上、け、事、降、之、柩、方、か、降、

お祈り下さむして、私共、老夫妻、之、り、望、之、世、中、に、て、留、事、あり

能、子、作、之、所、休、心、下、さ、む、事、様、の、敬、以、申、上、事、。以、由、之、由、申、上、事、

は申上事、が、福、家、の、心、の、力、を、去、三、老、也、何、用、て、是、が、不、自、由、の

大、め、と、因、の、事、。中、凡、の、得、氣、症、を、も、申、上、事、が、亦、之、の、祈、り、又

「之、元、之、腦」の、方、は、健、在、の、様、に、感、謝、の、心、を、申、上、事、。又

柩は、お、か、け、様、に、共、々、9、大、に、申、上、事、。又、地、方、倉、山、校、区、(倉、園、地、柩、園、地)

て、は、私、は、最、長、壽、者、と、す。私、の、次、は、9、大、に、安、世、の、三、人、の、事、。又、校、区、に、

毎、年、六、月、十、日、に、致、老、の、日、に、發、老、祝、祭、會、が、あ、り、ま、す。又、柩、の、事、は、9、大、が、

9、大、の、事、が、1、人、の、事、に、お、か、け、さ、す。35、0、個、の、子、孫、(毎、年、の、老、會、に、出、席、す、る)

失敗、の、事、は、其、の、物、。健、在、の、職、責、が、學校、の、老、人、の、心、に、老、人、の、早、死、の、心、の、

甚、合、老、年、之、氣、を、ま、た、け、な、し、防、止、を、す、と、之、を、心、に、し、た。防、止、方、法、と、して

柩、が、感、謝、感、激、の、事、は、讀、書、量、の、多、く、三、十、三、矣、也、。柩、は、甚、感、感、て、其、書、を、紙、に

子、が、亦、に、あ、る、之、の、因、り、と、す、也。

此、五、語、は、此、の、事、を、記、す、。柩、の、事、は、主、に、の、時、に、在、り、ま、す、。

:

主の御子のパンと水で祝福ご下さる。私(主)は女衆の向から病氣を
 除きまうらう。主のお心事は必ず其の通うにあつて信じまして感謝
 致し奉る。私(主)は99才の高齢に於て主の御名を凡部より引出す。主のいつくしみと
 心恵みがいづも私を直ご下さる。主はいつくしみも主の御名を信するにまうらう也。
 (公詩集236)

申したれまは。ホにちやかお中元の献(金)をやらせて下さいます。

『千人は世の左にたれぬ。一人は世の右に死ぬ。さびどわきめいはい
 生(す)ず。』

右の様は聖句を以前はトても興味あつた聖句と見ておりましたが、

左の字句が「異(よ)なる」と思ひますし、右の聖句が「ホにたれぬ」

詩編が「イサヤ書」の「いかにと思ひます」が「たれかある」がわかりず

もどかしい思ひです。

若し先生に訊かれましたら、右の様は「聖句(の)」にお義附きあるおれも

ありまはらば「救済」下さる。あら「誠」は「信」とは「幸」あると存
 じます。

叔父の遺訓

(末永寿兄、召される五年前大正十四年一月病床に於て)

榎本 百合子 (前田)

エホバ家を建てたまふにあらざれば建つるものゝ勤勞はむなしくエホバ城をまもりたまふにあらざれば衛士のさめをるは徒勞なり。なんじら早くおき遅くいねて辛苦の糧を食らうはむなしきなり。(詩篇一二七篇一、二節)

一、親の財産を相続したる子女は決して其増殖を計るべからず。増殖を計ることは却て損失を招く。父母の勤勞を継ぐものは、只管これを守ることが肝要なり、守れば必ず殖え増殖を計れば必ず減ずべし。此の事を心の石碑として必ず忘るゝこと勿れ。

一、金銭の貸借は絶対になさざること。信者が金を貸し、利を取ることは聖業を穢すのみ。貸せば利を取ることには当然なるが故にこれより禍を發するなり。父は貸家貸金のため聖業を穢したること数しれず父が数十軒の貸家を売却却は解体せしも之がためなり。

一、財産が実際より大きく見えぬ様注意すべし。財産が大きく見えるは禍なり。何事も母上と相談して祈りに依りて

事を定めよ。

エホバをおそれその道をあゆむものは皆さいはひなり。そはなんぢおのが手の勤勞をくらふべければなり。なんぢは福祉をえまた安處にをるべし。なんぢの妻はいへの奥にをりて、おほくの実をむすぶ葡萄の樹のごとく汝の子輩はなんぢの筵に圓居して、かれらの若樹のごとし。視よエホバをおそるゝ者はかく福祉をえん。エホバはシオンより恵をなんぢに賜はん。なんぢ世にあらんかぎりエルサレムの福祉をみん。なんぢおのが子輩の子をみるべし。平安はイスラエルの上にあり。(詩篇一二八篇一、六節)

一、弘海は神を恐れ父母の勤勞を重んじ幼時より今日まで一錢の金も徒費することなく廢物を利用し身の廻りをかざらず父母の慰安となりし事大なり。

一、蓋弘海に於ては与へられたる財産を保護する事却て迷惑と思ふ。只、財産の支配権を与へられたるのみにして弘海一己の自由に任するに非ず。申す迄もなく父と一体たる母のものなる事を忘れざるを要す(長女とき子、其他照子、實枝子を父に代りて勞りくれよ)

一、子女たり孫たる即ち弘海の兄弟甥姪に對し父が存命な

れば如何為べきや其邊を考へ父の遺志を繼續していたはること肝要なり。但怠惰より生じたる結果に対しては父は愛の鞭を加ふる時憐を施さず之は却て本人等のために害ありと信ずるが故なり。

一、申す迄もなく結婚は男女一生の大事にて神の子孫を造るか悪魔の子孫を造るか實に未來の幸不幸の繋がるどころ一度之を誤れば再び取り返しのかざるものなり。故に本人及家族の信仰は勿論、本人及両親祖父母の性質をも能く研究し、又其両親の養育法に留意せざるべからず。

一、良妻は良人の志望を遠大ならしむるも、凡婦は知らず識らず彼を腐敗せしむるなり。良妻とは神を畏れ、喜ぶものと共に喜び、人を中傷せず、人の長所を尊び、神の言を聞き入れ易き善良なる性質を具有する婦人なり。實に妻は男子の品性の製造者なり。若し善良ならざる妻を娶る時は、其母の性質子孫に及ぼし其家は悪魔の棲家となり愈々破滅に陥ることは申す迄もなきなり。斯様な事を弘海に対して申置く必要なきも、此事が氣懸りとなれば思の儘を申残すものなり。

一、時子姉上の結婚は七年間全く神に捧げ其間幾多の試みありたるも堅く信じ通し七年目に血に贖はれたる教会員一同の溢れる感謝の中に目度結婚式を挙げたることは忘

れざるを要す。又昌子姉上も一ヶ年間全く神に捧げ少しの人力を加へず一年目には又同様の式を挙げたり。此の事は何卒子々孫々迄伝ふることを切望す。

日常心得の事

悪きものゝ謀略にあゆまず、つみびとの途にたゞず嘲るものゝ座にすわらぬ者はさいはいなり。かゝる人はエホバの法をよろこびて日も夜もこれをおもふ。かゝる人は水流のほとりにうゑし樹の期にいたりて實をむすび、葉もまた凋まざるごとく、その作ところ皆さかえん。あしき人はしからず風のふきさる枇糠のごとし。然ばあしき者は審判にたへず罪人は義きものゝ會にたつことを得ざるなる。そはエホバはたゞしきものゝ途をしりたまふ。されど悪きものゝ途はほろびん。(詩篇一篇一、六節)

一、何事も祈りに依りて進退し神様の旨と信ずる事のみを擇び取るごとく神の聖旨を窺はずして為したる事は總て禍に帰す。父が明治三十五年より今日までの経路をかへり見るに總て祈りに依りて神の聖旨と信じてなしたる途はことごとく祝福されたり。

一、〇〇〇〇、〇〇〇〇兩株式會社に對する父の失敗はお前

方の渡世上善き誠めとして深く心の中に止め置かれよ。

父の經驗に依りて兼ねて父は會社の經營につき大なる自
臆信と共に誇りありしために遂誘はれて、惡の罫に陥り
て身退きの叶いがたき苦境にまで立ち至りたり。

最初より父には當會社に對しては少しの自己の野心なく
私費を投じて株主全体の利益を計り我國一の堅固なる會
社に持直し然る上にて退社せんとの心組にてかゝりたる
も一部の株主は却て反對に解釋し自己の利益のために會
社を併呑するの企てなりと稱し初め父を信じたる株主迄
其惡宣傳に迷はされ父は物質に於ても數萬の損害を受け
たるのみならず爲之神の聖榮を穢し大なる耻を受けるに至
り其余波は子孫にまで及ぼす關係を惹起せり。

一、共同事業に關係せざる事。宗教と雖ども団体に關係

し或いは其の団体に員にならざること。只宗派信條階級を
超越して個人傳道を掌る教師を援助せよ。

地方株を絶対に取得せざること。國縣市會議員は絶対に
關係せざること。信者が過半数を占めたる事が出来れ
ば兎角少数の場合は却て聖榮を穢し恥を受くるのみ。

一、申す迄もなく神の外に人も權勢も恐るゝに足らず。

(欧州戦争の實驗に於て明かなり。)

神に感謝して常に己れの最善をつくせ。成功を急がず寸

陰を空しくせず、人は此の世に働きたることを
忘れず憂き事の積るも決して、ゆめ落膽せず何事も神を
愛する者の爲には悉く働きて益を爲すを吾等は知れり。

(ロマ書八章二八節)

一、父は無学短才にして何事も經驗の乏しき者なれども未熟
を恥とせず謙遜の心を以て人の長所を尊び怠らず奮闘を
続けたる所憐みに富み給ふ神は尊き人々を通して後援を
与へられ大過なく今日に至れり。

一、辦當店は天より授けられたる賜物なるが故に之を大事に
せよ。平常門鐵局長、課長、掛長、構内榮業担当員、運
輸事務所長、及驛長助役其他驛員一同等の同情と援助を
得るに非されば継続すること至難にして又乗客に満足を
与ふることを得ざれば以上の人々に對しては常に交誼を
厚くすべし。

一、辦當調理は神の聖前に調理をなし如何にせば乗客の口に
適するかに注意し外面も必要なれども味に十分の注意を
なし神の聖榮を頭はずべし。憐みに富み給ふ神は靜男夫
妻を父に與へ彼夫妻は懸命にて今日迄奮闘を続けたるこ
とを決して忘るゝ勿れ。同夫妻の病氣の場合は最善を盡
して看護すべし。

一、弘海に對し日常の心得を申残したることは靜男に於ても守り呉れる事は勿論弘海が絶對に守る様に厳かに監督する様に呉々も頼む之は日常の心得として言遺したる事は是は神の聖旨と信じ父が六十年間の實驗にして之れを一項にても輕々しくする時は必ず禍を来す。嗚呼神の子たり御祝福の下に日本に於ても最も小さき五島に生れ品性劣等にして罪人の首なる獸の如き惡むべき性質を具へたる僕を憐み暗きの權威より吾等を救出して其愛子の國に遷し給へり。我儕その子に由て贖ひ

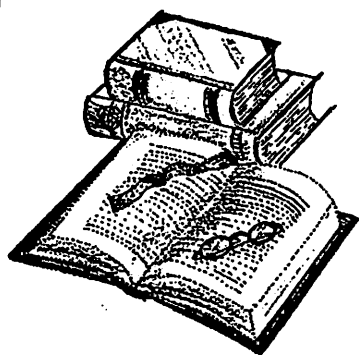
即ち罪の赦を得て御祝福の下に物質に於ても何不自由なく與へられ子供も長女を始め男女交る交る十人與へられ神の恵を思ふ時只に驚きおのゝきて感謝に溢れ何と言葉の言現はすことを知らず。どうぞ父なる神子たる神聖靈の神の與へたまひし子孫に引続き御祝福を垂れさせられ三位一体の神の器となり主の仰せ給ひし如く地の塩となり世の光となりて天の父を御紹介申上げる子孫を御約束の御聖言に従ひ濱の砂の如く殖し給はん事を切に祈る。アーメン

遺言 (昭和四年三月召される前)

一、父母の遺産は唯生活に必要な丈を譲り他は全部財団法人名義とし神様の御用に捧ぐる希望なりしも今の場合之を遂行する事能はざるは遺憾に堪えざる次第なれども之を敏毅、弘海に譲るを以て兩人共父母の意思を継ぎ之を自分のものとは思はず神の御用に用ふる事。

一、葬儀の場合聖名はかくれて故人が崇められるが如き事なき様父の場合は履歴等は決して讀まざる事。九州南端の小島に生れ知慧も知識もなきものを神様の思ひに優る惠により今日に至りたる事を充分に証言し聖名と御寶血の高らかに崇められん事を切に祈る。

福岡大濠公園教会の創設時、家を捧げて集會を開いて頂いた末永寿兄の遺訓です。末永弘海師(旧姫路福音教会牧師)の尊父であり、私の叔父で、此の叔父夫妻の信仰と祈りで、わたしも今日の素晴らしい生涯に導かれました。



榎本 百合子

詩集「別れの日々」

(脆くはあるが暗くない)より

伊規須 太郎 (戸畑)

連れ合い

この二・三週間 「夫を語る」という番組をいくつか聞いた
ラジオ・ライブラリーだったから 再放送に違いない
有名作家などの妻たちが 語っていた

ある妻は 夫の作品を見て……

自分が地を這うように金策に奔走しているときに

彼は全く違う別世界に遊んでいた……と驚いていた

ある人は…身勝手だが思いやってくれる優しさもあった

私を許し応援はしたが 結局理解はできなかったと言った

誰よりも近くで見えていたから 一番よく知っていた筈だが
それでも本当の事はわからなかったと言う

箴言に「心は万物よりも偽るものにして甚だ悪し」とある

自分が自分の心を知り得ないのであれば

異なった個体である配偶者を知り得ないのは当然と言える
人間(関係)とは何と深いものだろうか!

夫婦は固定契約関係ではなく 成長・熟成する関係だと思ふ
真の証人は双方をよく知っている……命の源までも!
泰子も私も知られている しかしお互いは知らなかった
(一九九九年四月二九日)

青春

新聞歌壇を眺めていて フト一首に目が止まった

「逝きし夫を大塚さんと呼び合いて友と語りぬ青春戻り来」
語り合っている友人とは どんな関係だったのだろうか?

泰子は旧姓を「東」といった

教会の一時期を画した女性だったかも知れない

両親は教職にあった人である

実姉は薬局チェーンの会長夫人だった

実兄は牧師だった

四人兄弟の場合両親の愛情は四二〇四の比率になるそうで
○(次女)が一番たくましく育つと言われていた

その泰子のことを語り合える人も少なくなってしまうた
これもあれも 巻き取られたロールフィルムのようだ

私は青春に戻りたい訳ではない 昔が懐かしい訳ではない
体が少々弱つても今が青春 前途洋々いよいよ意気盛ん！
晴れ舞台は まだまだ先かも知れない？……

イヤ先と言うより 現在の毎日がロングランの真剣勝負
楽ではないが これほどやり甲斐のある仕事(人生)はない
もし許されるなればその日まで全力疾走…すると

自動的にPPKペンペンコロ となる ならなくても一向構いません
(一九九九年七月二五日)

線路

不思議な線路がある

T線は一九二六年四月三日から始まっている

Y線は一九三二年二月六日から始まっている

これら二本の支線が合流し しばらくして分岐している
現在は 互いに相手が小さく見えるほど離れてしまった

合流点は一九六〇年一〇月一六日で はっきり見える

しかし分岐点のはっきりしない？

ゴトンと音がして アツと思った時はかなり離れていた
どこから離れ始めていたのだろうか？

鉄道線路の分岐点をじっと眺めて不思議に思う

知らぬ間に先端レールを飛び越えることであるだろうか
実際にそんなことがあつたら大事事故だろう

それぞれの車窓から見る風景は大きく異なってしまうた

Y線では陽がトツブリと暮れて闇になるうとしていて
目を凝らせばまだ何か見えているかも知れない

しかし私には もうそれは見えない

T線の車窓には彼女の見たこともない風景が走っている
車も玄関も室内も冷蔵庫も本棚もベッドも机も炊事場も
鍋釜もシャワーもトイレも洗濯機も倉庫も安否発信板も

(一九九九年八月一四日)



外出支援

「泰子さんはクリスマスやお正月に外出されますか？」
とX寮母さん

「園からお尋ねがありました、『ない』と返事しました
帰つても会う人がいる訳じゃないし、クリスマスや
お正月は（教会の特別集会で）むしろ忙しいんです
できるだけ面会に通いますので、園でよろしく願います
だいたい私を見ても、こんなふうで喜んでくれませんか」と私

すると寮母さんは言った……………「イエ

泰子さんと私が外出する事は許されないだろうと思います

しかしご主人と泰子さんが外出される時に

私が（私的に）同行するなら問題はないと思います」

「エッ？……ワーツ（涙！）有難うございます

先日の衣服のことといい、外出のことといい

そんなにまでお心をかけて頂いて、有り難うございます

こんなことつてあるでしょうか…暮れやお正月には

ご自分のおうちも忙しいのに、私どものためにそんな事を」

何度も何度も、心の中で頭を下げながら帰った

運転も軽やかだった、泰子の心にも灯がともってほしかった

（一九九九年二月一三日）

茜色

近く、泰子のケアカンファレンスがあるそうで

家族としての要望・願望などがあれば……と言われた

それから数日、考えるがなかなか答えが出てこない

泰子は言葉という世界を失って、話すのはもちろん

読む・書く・聞く……も全くできない

もろもろの見当職は失われ、朝も夕も分からず

自分がどの誰であるか、夫の顔も分からなくなっている

（たとえば痛いという）感覚も鈍くなり動作は緩慢になり

手の震えが始まり、トボトボとしたスリ足は危なっかしく

段差につまづかなくても（自分の）足のもつれで

いまにも倒れそう……意識のレベルも下がり

なかば眠っているかと思われるほどである

しかし良質の介護を受けて、それなりに安定しているから

何も言うことはない それより泰子の身になってみよう

◆夕焼け空の茜色は消えかかり暗闇が迫っている

◆身の回りはすっかり日が落ちて物の形は無くなった

◆足下には戸惑いの渦がにぶい音を立てて巻いている

◆誰かこのかすかな意識の世界を理解してほしい

この最後の一行が「願い」と言えば言えるかもしれない

(二〇〇〇年二月一五日)

投票

一九九六年に一度国政選挙があったのは確かである

蒲生病院のN医師と 泰子の投票行動について

話し合った事があったと記録されている

それから四年 最近になって婦人会の役員と話していると

「九六年の選挙の際 受付をしていたが 奥さん(泰子)は

名前を確認されても言えなかった(生年月日は勿論)

しかし顔見知りなのでそのまま通しました

これはおかしいと思いました 間もなく入院を知りました

その前と前の選挙でも おかしいと感じていました

と言われた 初耳だった すると九三・四年ごろには

すでに痴呆がそうとう進んでいた訳である

初診の時に「これは恐らく五・六年前から始まっていた

でしょう」と言われたのは当たっていた

すると もうかれこれ一〇年になる

痴呆の始まりを そのとき気付くのはそうとう難しい

数年遡って 思い当たる事が多いのではないだろうか？

だから 自分の家族についてはもはや後の祭りだが

他人の状態はよく見える 市場のあの奥さん危ないと…

この目を社会資源として大いに活用してほしい

(二〇〇〇年三月六日)

四月一九日

聞くともなく聞いていたラジオが 四月一九日と言ったので

ピクツとした 日蘭交流四百年 リーフデ号が臼杵に

漂着した日らしい 一六〇〇年といえは慶長五年…

関ヶ原の戦いの数か月前のことである

しかしこの日は私にとっても忘れられない日となった

一九九七年四月一九日に 泰子は蒲生病院老人性痴呆疾患

センターに緊急入院した ちょうど三年前のことであった

一週間ばかり私が寝たり起きたりして食べられなくなった
かねて「緊急の時は連絡して下さい一床は空けておきます」と
言われていたので 早速お願いして昼ごろ家を出た

「病院に行こう」「エッ」それだけだった 理由も行く先も
分かって貰えなかった 何一つ準備はしなかった

普段着ふだん履きで 手にてを取って玄關を出たとき

彼女は再び帰らぬ身となった 私が病院を出ようとした時

彼女は必死で私にしがみついた かわいそうだが私も必死

それをやっとの思いで振り切つて帰つた私は

閉店まぎわの衣料品店に駆け込み 婦人ものの衣料を

二万円ほど買って差し入れの準備をした

(二〇〇〇年四月一七日)

カナリヤ

西条八十作詞 成田為三作曲

♪1 歌を忘れたカナリヤは 後ろの山に捨てましょか

いえいえそれは なりませぬ

♪2 歌を忘れたカナリヤは 背戸の小藪に埋けましょか

いえいえそれはなりませぬ

♪3 歌を忘れたカナリヤは 柳の鞭でぶちましょか

いえいえそれは かわいそう

♪4 歌を忘れたカナリヤは 象牙の舟に銀の櫂

月夜の海に浮かべれば 忘れた歌を思い出す

聞いているうちに

胸が熱くなり 涙がこみあげてくる

痴呆(失語)者がカナリヤだとしたら…?

捨ててはなりません

埋けてはなりません

ぶつてはかわいそうです

象牙の舟は何ですか?

銀の櫂は何ですか?

月夜の海はどこですか?…ハアー フーッ!

我が思い出（移動編一）

鈴木 一幹（前田）

一 満州出発

我が隊は中隊長殿を先頭に六頭仕立ての大砲八門と、二頭仕立ての弾薬車拾六輛、輜重車約二拾輛を二百名余りの兵で誘導し、その隊列の長さは約三百メートルにも及んでいました。

隊列は黙々と、ただひたすらに東寧駅（当時の満州国の北端の牡丹江省の東寧県にあった終点の駅で黒龍江「現在のアムール河」を挟んで当時のソ連と対峙していた。）を目指して進行しました。

道路上の積雪は、車輛や人馬で踏み固められ、氷状となり、馬は蹄に鉄さい（スパイク状の蹄鉄）が取り付けられているので滑らないが、初年兵等徒歩で行進する兵は、防寒靴（内側は毛皮の布靴でゴム底）で歩くので滑りやすく、片手で砲車や馬の引具（馬と車輛を連結してある革のベルト）をつかまえて滑らぬように気をつけて歩きました。

馬のいななきと、砲車等の車輛の響き以外は何も音は聞こえませんでした。

道路沿いの満人の家々や周囲の畑や、クリーク（小川）には拾センチの雪が積もり、あたり一面銀世界となっており、毎日の砲手訓練で駆け巡った山野を眺めながら、この眺めも今日で見納めかと思ひ、この目にしつかり焼き付けて置くことにし、感慨ひとしおでした。

新任務地も知らされぬまま、隊列は一步一步東寧駅を目指し進みました。シベリヤの方から、凍りついた黒龍江（現アムール河）を渡って吹いてくる北風はさらに冷たく感じ、頬や鼻・耳等痛さを感じました。

そのうち、当隊はやつと東寧駅に到着しました。駅には先着の他部隊が、列車に乗り込むところでした。列車は客車が前の方で、後部は有蓋貨車が連結されていました。

中隊長殿から「これから停車中の列車に乗車するが、先に貨車に砲・弾薬・馬・馬糧等を積み込み、完了後に各班毎に乗車せよ」との命がありました。

我々砲手班は、貨車の扉を開けて、貨車から斜めに厚板を掛け砲車・弾薬車と交互に、掛け声と共に人力で引き上げて乗せました。

しかし、御者班の兵は馬を貨車に入れようとはしますが、馬が嫌がつて、立ち上がる馬、後ずさりする馬、ける馬などがいて、かなりてこずっていましたが、発車予定時刻の十二時

までには、ほぼ積み込みも完了し、各班毎に客車に乗り込みました。

今回乗り込んだ車輛は、満州への赴任時の貨物車輛ではなく、普通の客車だったので、やっと今度は人間並みの扱いとなり、ほっとしました。

丁度十二時頃発車しましたが、車窓は全部鐵戸よろいど(木製)が閉められ、「絶対にあけてはならぬ」との隊長命令でした。

これは防諜(スパイ活動を防ぐ)上のためだったのでしよう。駅に停車してもどこの駅なのか、駅名を見ることもできませんでした。

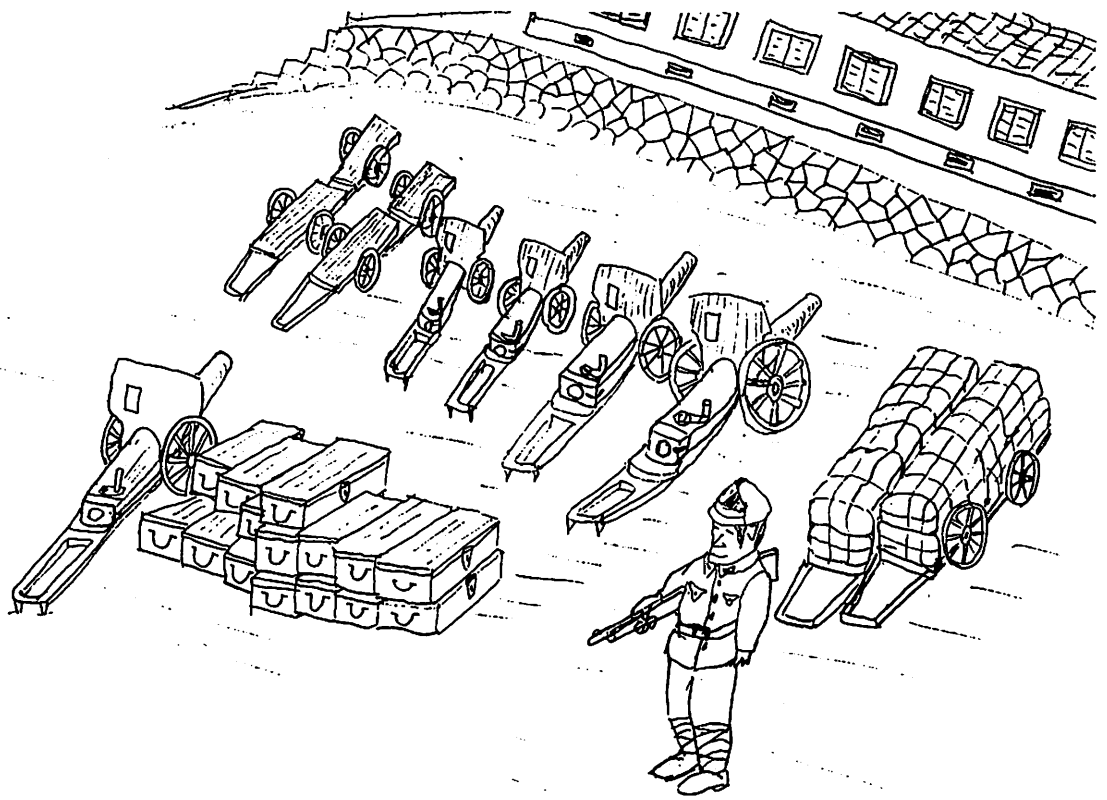
「昼食をとれ」の命令で、各自携行の飯盒はんごうを取り出し、三食分を詰め込んであるので、その内の約三分の一を食べることにしました。アルミの飯盒で、しかも東寧駅までに長時間を零下十度の中を携行したので、飯も半分凍って「カチカチ」



でしたが、干物の「開きメンタイ」(マコを取り除き、背割りにし、乾燥したメンタイ)の副食と共に、どうにか食べました。車内の天井には、一〇W位の電灯が数ヶ所点灯しているのみで薄暗く、お腹も適当に太り、何もすることもなく、車内暖房も良く、うとうとと眠り出す様子でした。

列車は前側に客車が四両、その後部に貨車が二〇輛(大砲八門、弾薬車、馬、馬糧等を積んである。)連結されているため、発車時と停車時にはかなりの強い衝撃と振動を受け、丁度昼食と発車とが同時でしたので、中には飯盒を取り落とす兵もいたようでした。

私の腰掛けている四人席には戦友の川上君と初年兵ばかりが一緒にかけていましたが、誰も行く先を知ってはいませんでした。また「無駄口はいっさいたたくな」との命令も出ていましたので、ただ顔を見合わせるだけでした。車内は静まりかえり、車輪の音と、時々汽笛の鳴る音のみ聞こえていました。そのうち、誰がどこから聞いたのか、前の座席の坂上等兵殿が小さい声で「おい、お前達知つとるか、この列車は今、朝鮮の釜山に向かっている。釜山から船に乗って南方に行くそうだ」と知らせてくれました。



二 国防婦人会による接待

列車は翌日午後四時頃釜山駅に到着、貨物車輛から、それぞれ大砲、彈藥車等を降ろし、約百頭の馬を御者班の兵が引き降ろし、隊列を整えて、釜山市の高台にある小学校まで行進しました。学校は冬休み中で、臨時に兵舎として貸与されたものでした。

大砲や彈藥車、輜重車は、校庭に並べて、シートを掛け、砲手班から数名の立哨^{りっしょうへい}兵が出されました。また馬は校庭に繫^{けい}駕^が柵^{さく}を設け、これに繫^{つな}ぎ、ここにも御者班から数人の立哨兵が出されました。

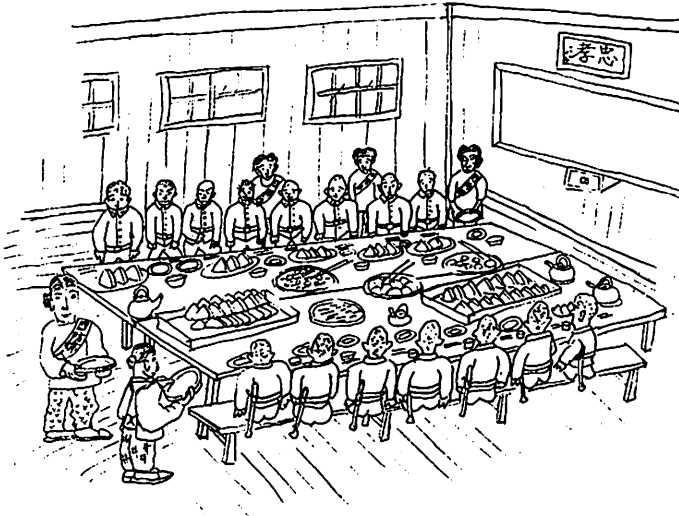
満州の東寧の連隊を出発する時は早朝で、零下二十度位でしたが、ここ釜山では気温も暖かく感じられ（防寒服を着ているためか）夜間で零下二―三度に下がる程度とのことでした。

教室内の机・椅子は後ろの壁に積み上げられ、板張りの床にはゴザが敷かれていました。佐藤班長殿は「我々が携行した食事は三食分で、車内で昼食・夕食・朝食を食べたが、今日の昼食は欠食となり、少し腹が空いていると思うが今から夕食をとる。場所は隣の二年生の校舎で用意いただいた。これは釜山市の国防婦人会の方々の奉仕だと聞いた。各自は感謝を持って有り難く頂戴するように」と説明し、隣

接校舎に引率されました。この棟は二年生の教室で、室内には生徒の机と椅子が向かい合わせで四列に並べられ、机の上には飯茶碗・味噌汁椀・箸等が置かれ、餅箱には麦飯のオニギリとタクワン漬け・リンゴが入れてありました。

割烹着かっぽうぎに国防婦人会のタスキを掛けたご婦人方が、かいがいしく、お椀に味噌汁をついだり、お皿にタクワンやリンゴを盛って配膳していました。

一同は子供の椅子のため腰掛けにくいようでしたが、何とか腰掛けました。班長殿は兵を代表して「今日は大変お世話になります。遠慮なくいただきます」と御礼の挨拶をし、兵一同「いただきます」と言っ



て箸をとりました。

久しぶりに温かい味噌汁の味、タクワン漬けの味をかみしめ家庭的な雰囲気にはたりながら食べました。「味噌汁のおかわりをどうぞ」と言ってお盆を持って横に立っている四〇歳位と思われる日本婦人の横顔のなんと美しいことか、早めに汁を吸い込んで、「おかわりをお願いします」と言ってお盆を差し出し、お盆の上に乗せながら、しみじみと、婦人の顔を見ると、故郷に居る従姉の泰子姉さんに、どこか似ているようでした。

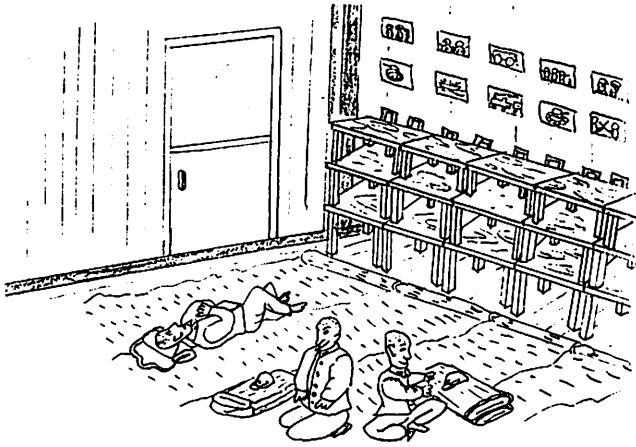
三 釜山市内の風呂屋

夕食を終え、元の教室に戻り、佐藤班長殿より、これから先の行動予定の説明がありました。「これから各自所持品の整理をし、引き続き、市内の風呂に行くように、詳細は中村兵長から聞くように、そして風呂から帰った者から、今着ている防寒服は全部夏服に着替える。新しい服はそのときに渡す。」次に明日の予定は、朝六時起床、人員点呼後朝食をとる。七時校庭に整列し、釜山港埠頭ふとうに行進する。以上。「次に中村兵長より入浴券の配布を受け「この券の裏面に印刷している風呂屋は、どこでも入浴できるので、印刷してある配置図を見て行ってくるように」とのことでした。

地図を見ながら、風呂屋の位置を確かめ、少し遠い方が入浴人数も少ないはずだと思い、川上君と相談し、早速洗面具を持って二人で出かけることにしました。

所持品の整理をしながら、教室の壁に生徒の書いた絵画が貼ってあるのが見えました。立ち寄って一枚一枚を眺め、黒のクレヨンで戦車らしいものが書いてあり、これは男の子の作品でした。次

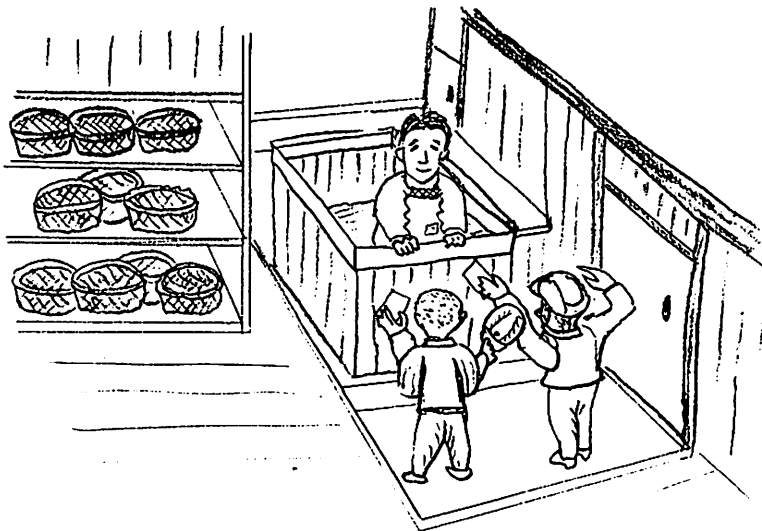
の列は女の子の作品と思われ、日の丸の旗を持った婦人会の方々の姿が書いてありました。名前が下の方に書いてあり、日本名の分と、韓国人名のもと混ぜていました。従って、この教室の生徒は、韓国人と日本人



と一緒に、日本語による教育が行われているのだろうと思いましたが、

川上君と二人で校門を出て坂道を下り、住宅地を通り抜け、ほとんど戸が閉まっている商店街を一気に通り過ぎ、図面を見ながら行くと、一番遠いと思われる目的地の風呂屋に着きました。

男女別の入り口の中央に張り紙で「兵隊さんは午後五時より、一般は午後七時より」と書き出してありました。六時少々過ぎてはいましたが、入るのは我々二人だけでした。「今日は、風呂に入れてください」と言って番台に座ってる

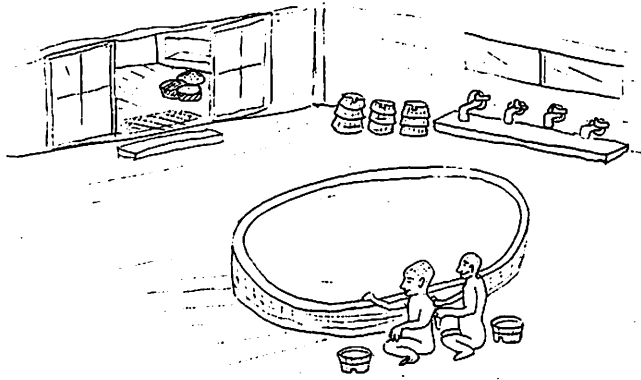


おばさんに入浴券を差し出すと「いらっしやい」と言って、笑顔で歓迎してくれました。

満州を出発する約一週間前から、出勤準備に追われ、一度も入浴していな

かったので、身体があちこちかゆく、おそらく「シラミ」が繁殖しているためだろうと思いましたが。

脱衣場も、きれいに清掃されているので、脱衣籠に脱衣すれば、あたり一面シラミが飛び散るだろうと考え、申し訳ないと思いつつも脱衣しました。



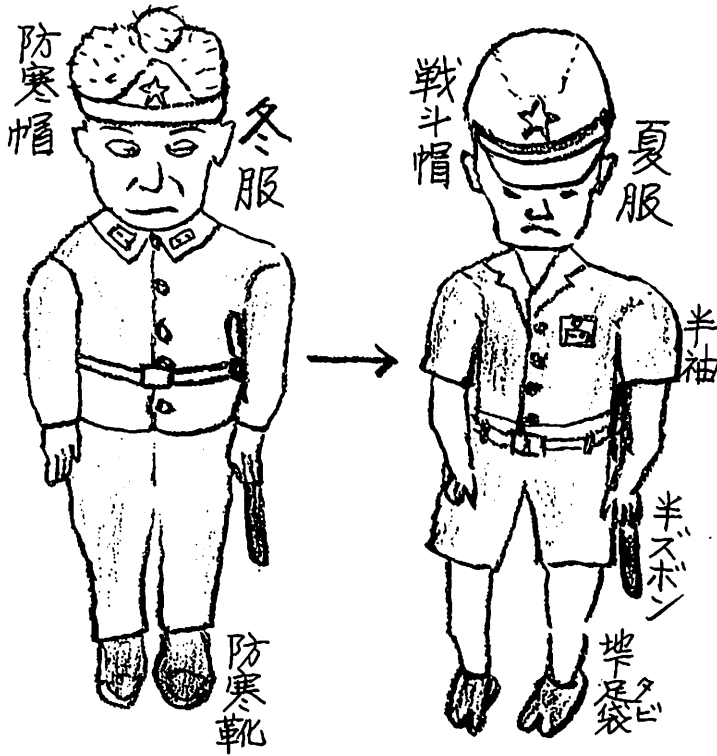
浴室入口のドアを開けて見ると誰一人入っておらず、本当に一番風呂でした。浴槽につきり、川上君と久し振りに「実にいい湯だなあ」と手足を延ばし、互いに背中を流し合って、厚く溜まっていたであろう「あか」を流しました。

帰りに番台のおばさんに「有り難うございました」と挨拶すると、おばさんが「兵隊さん、あなた方はこれからどちらの方に行かれるのですか」と尋ねられました。私は「さあ、どちらに行くのか知りませんが」と答えると、「私の長男も満州の関東軍に入隊しましたが、昨年一〇月ビルマから一度便りがあっただけでその後はどこでどうしているのか分からず心配しています。あなた方も体に気を付けて元気に過ごしてください。家の方も心配していると思いますので、出来れば手紙を出してあげたらよいですよ」と言われ、ハンカチで眼頭をおさえられていました。

この言葉に急に故郷のことを思い出し、母や祖父母は今頃どうしているだろうかと気になりました。礼を言っただけ帰途についても、あの思いやりの言葉と、子供への気持ちが身にしみるのを感じました。永らく入浴していなかった身体の汚れも、すっかりきれいになり、ほどよく身体も温まり、商店街の中をゆっくり通り抜け、学校に帰りました。

四 夏服での乗船

「鈴木二等兵、只今帰りました」と言つて教室のドアを開けると、中から中村兵長殿が「鈴木・川上二等兵、帰りが遅かったやなかか。どこをそついとつたか。早く服や下着を着替える」と言つて、部屋の角に山積みされた衣類を指差しました。



室内ではすでに着替えた兵達が、階級章の付け替え等をしていました。我々二人も、早速急ぎ着替えました。

室内はストロブのおかげで暖かく、ほっとしました。今まで着ていた防寒被服や下着は「シラミ」と一緒に廊下に用意されていた大きな竹籠に脱ぎ入れました。靴は防寒靴に換えて、ゴム底の地下足袋が支給されました。

夜九時、班内の点呼があり、就寝には一人毛布二枚が貸与され、約五十名の兵隊たちは蚕棚かいこの蚕かいこのように雑魚寝ざいこねで就寝しました。勿論枕はなく、各自携行の雑ざいのううを枕代わりに用いました。

翌朝六時起床、点呼後、隣棟(夕食をとった二年生の教室)での朝食を終え、軍装を整え、全員校庭に集合しました。

雪は降っていないが、鉛色の雲が低く垂れ込め、寒風肌を刺すようで、屋根からは幾本もの「つらら」が下がっていました。半袖、開襟の上着に半ズボン、地下足袋姿で、皆はガタガタふるえていました。班長殿の「気を付け」の号令までふるえて聞こえました。

我が隊は、隊列を整え、釜山港目指して出発しました。おそらく今日の夕方には同校に再び関東軍の別の部隊が到着するだろうと思いました。

校門の左右には食事の世話をしてくれた国防婦人会の一

行が、日の丸の手旗を持って見送りに来ていました。誰言う
となく、こちらから「お世話になりました。ありがとうございます
ました」と言い、「お元気で、さようなら」との声を聞き、馬の
蹄の音と砲車の音を轟かせて、坂道を一気に下りました。

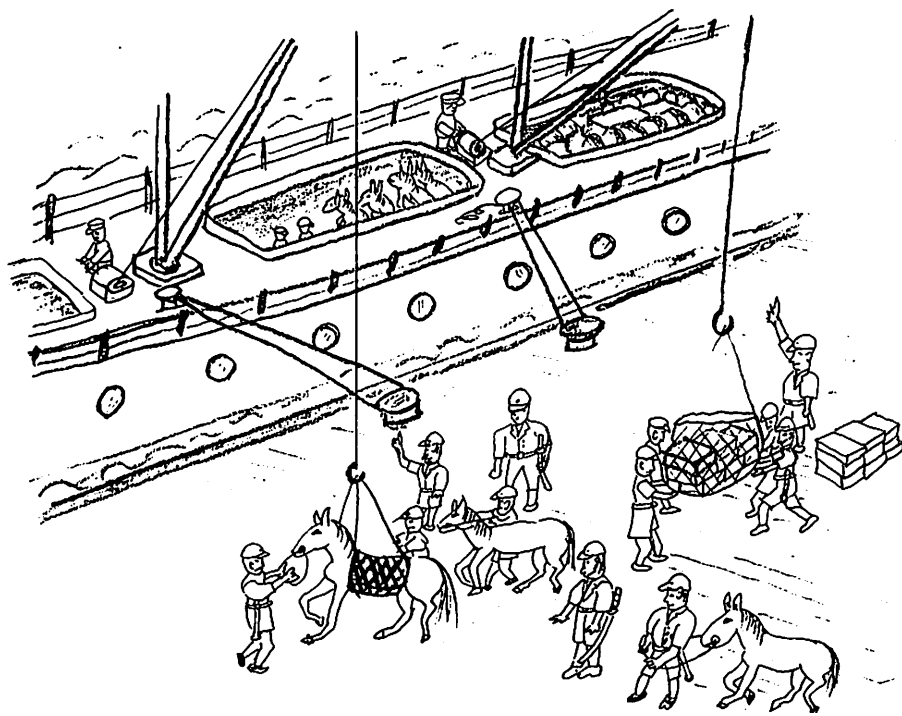
この学校も軍の移動のための仮宿舎に提供され、後統部隊
が次々とお世話になることだろう。一宿一飯のご恩にあずか
り、久し振りに家庭的な食事等のサービスを受け、特に満州
での軍隊生活では、満州人を見るだけで、久しく日本婦人に
会える機会がなかったが、はからずも、この学校で日本婦人
に会えたことは、これが最後の見納めかと、感慨を胸に秘め
て立ち去りました。

我が隊列は国道に入り、早朝ではあったが、道路沿いには
女、子供が集まり、また民家からも人々が飛び出し、隊列の
通るのを見送っていました。釜山港までは約五キロで、一時
間くらいかかることでした。

最前列の馬上から中隊長殿の「軍歌始め！」の声があり、前
列二個分隊(約百名)と後列の二個分隊(約百名)が一節ずつ交
互に歌い始めました。(砲兵隊の軍歌)「袴にははゆる山吹色
の、軍の骨幹、誉も高し、我等は砲兵、御国の護り、以下略」
馬の蹄の音に合わせ、徒歩の兵の靴音も勇ましく……と言
いたいところですが、地下足袋ばきであるから、歩調の音もつ

つましく進みました。

沿道添いの商店や飲食店はまだ閉められたままで、看板の
漢字やハングル文字が見え、朝の静かなたたずまいでした。
午前十時頃釜山港岸壁に到着し、直ちに隊列が解かれ、御



者班の兵は馬から鞍引具をはずし、砲手班の兵は砲車や弾薬車を岸壁近くまで運びました。岸壁には我々を待ち受けている輸送船が十数隻接岸していました。いずれも大型船ではなく、千トンくらいだとのことでした。各船の近くには、すでに他の歩兵部隊や工兵隊、輜重隊等の各隊が集結し、積荷の準備に追われていました。そのうち各船とも一斉に荷物の積み込みが始まり、船からクレーンのロープが吊り下ろされ、馬が一頭づつ空中に吊り上げられ、やがて船倉に吊り降ろされていきました。

一方のクレーンでは弾薬箱や大砲が吊り上げられ、大砲は船の甲板上に右舷と左舷にそれぞれ四門づつ配置され、馬や弾薬箱等は船底の船倉に吊り降ろされました。

クレーンの操作は船員が行っていましたが、それ以外の荷物のロープ掛けや網への取り付け、取り外し等は関係の兵等が陸上と船内とに別れて行われました。その作業の中で一番苦労していたのが御者班の兵で、馬が嫌がって暴れるので、手こずっていたようです。

積込作業が終わり、乗船命令が出ました。各中隊毎にタラップを上り、船内に入りました。舟はもともと貨物専用バラ積み船のため、全く客室はなく、船腹に仮設の床が設けられていました。

乗船した兵員を概算すると、我が砲兵中隊が約二百名、歩兵二個中隊で四百名、工兵隊一個中隊約二百名、輜重隊一個中隊約二百名、計約一千名で、仮設の床だけでは到底収容できないと思いました。この状態でこれから先、目的地（行き先不明）まで幾日かけて行こうとするのか、船底には多くの荷物と共に約百頭もの馬がすし詰め、先行が非常に不安に感じました。

五 船上での砲撃訓練

十二時近くになり、昼食として各兵に薄板に包んだ握り飯二個とイワシのミリン干しとタクワン入りが配られました。ほとんどの兵はすし詰めのため、立ったままで食べていました。

十三時頃、船のドラが鳴り、汽笛と共に出港となりました。一同は外の景色も見られぬままに船は釜山港を離れました。しばらくして船は大きく横に、或いは上下に揺れ始めました。港から外海に出たらしいなと思いました。

一時間位経った頃、佐藤班長殿より「砲手班の渡辺上等兵外六名、今から右舷甲板の前から二番目の砲の位置に集合。対潜砲撃訓練を行うから急げ」と命令がありました。

渡辺上等兵は二番砲手（一番技術に熟練して大砲の眼

鏡をのぞき標的に照準を合わせる担当)で、彼から残り五名の名前を呼ばれ、私も戦友の川上君も一緒に呼ばれました。

背負い袋と雑のうを他の兵に預け、帯剣のみ腰に付けて急ぎ魚網を伝って甲板に登りました。甲板上は歩兵部隊の兵達でほぼいっぱいでしたが、押し分けて通り、やっと砲の位置に集まりました。

空は曇り、北西の風が強く、波も高く、船は上下左右に四五米動くので立っているのも難しく、物につかまっていなと倒れそうでした。左側に並んで航行中の輸送船も船の揺れで全く見えなくなる有様でした。右手後方に見える島は対馬とのことでした。

前田中隊長殿は佐藤班長以下砲手に対して直ちに砲撃訓練をするように指示をし、我々は砲に被せてあるシートをはずし、砲口のキャップを取り除き、弾薬箱から実弾十発と信管十個を取り出し、砲の真後ろに用意しました。

満州の砲撃訓練では空砲を撃っていましたが、実弾を撃つのは初めてでした。私は一番砲手を命ぜられ、川上君は三番砲手を命ぜられました。後の四・五・六番砲手は弾に信管を取り付け、三番に渡す準備と撃った後の薬莖やっぎょうの始末をする役でした。私は満州では、しばらく事務室勤務でしたので、一番砲手の動作がうまく出来るだろうかと少し不安でしたが、

懸命にやる決心をしました。

半袖、半ズボン、

地下足袋ばきで、

一月の北の寒風を

受け、身体全体に

武者ぶるいともつ

かぬ震えがしてい

ました。佐藤班長

殿の号令「砲撃用

意」、「目標：前方

の敵潜水艦」、「直

接照しょうじょう準」、「榴弾

瞬発信管砲撃開始」

を聞き、私は右手

で大砲の閉鎖機

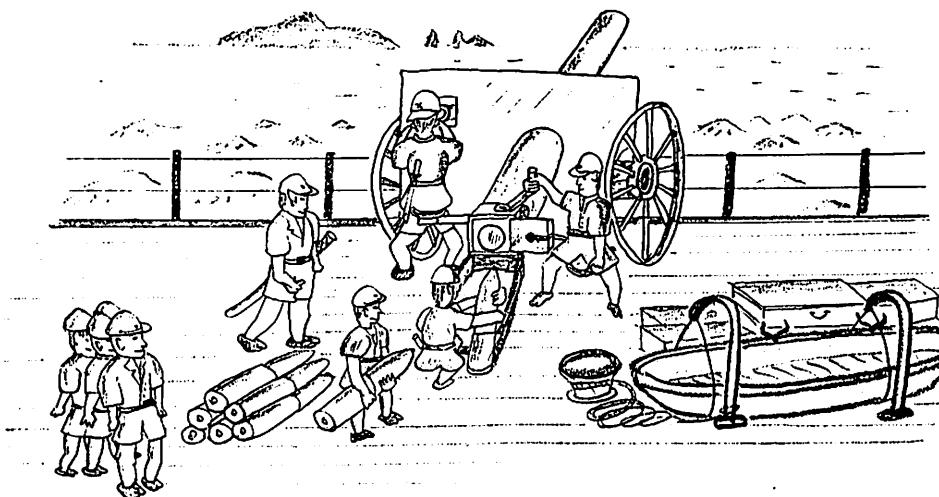
(弾を大砲に詰め

る時に開ける部分

名)を開き、三番

砲手の川上君は四

番砲手からもらつた信管付の実弾を



砲口に差し込みました。これを見て私はすかさず、左手で閉鎖機を閉め、「よし」と大声を出しました。

二番砲手の渡辺上等兵殿は砲の椅子に腰掛け、パノラマ式眼鏡をのぞきながら、照準を合わせ、「よし」の掛け声を発しました。その時すかさず佐藤班長殿が「打て！」の声を発しました。私は間髪を入れず一気に竜条りゅうじょうを引きました。「ドドン」と大きな音と同時に砲身が一米程後ろに下がり、「シユルシユル」と砲弾の飛び行くのを感じました。私はすかさず閉鎖機を開けると、勢いよく薬莢が後方に「カランカラン」と音を立てて飛び出しました。

甲板上の砲の周囲には歩兵部隊の兵達が、かたずを飲んで見守り、あまりの音の大きさに驚くと同時に耳を両手でおさえ、砲撃の都度「ウオー」と、それぞれが声を出していました。我々砲兵は砲撃の瞬間には、口をゆるめておけば、耳の鼓膜がゆるみ、耳には支障が残らないと教わり、砲手は砲撃時に口をアパーと開けて鼓膜が破れるのを予防していました。連続十発を撃ち終わり、無事砲撃訓練を終えました。

砲撃訓練後、班長殿の指示により、砲の砲身の洗浄作業を行い、弾薬箱に薬莢を納め砲車の下に置き、砲口に皮のキーツをはめ、大砲全体にシートを被せている時、後方から「鈴木さん、鈴木さんでしょ」との呼び声がしました。

私は思わず後ろを振り向きました。私を呼んだ方は、母校豊津中学で一年先輩の坂本さんでした。（私が入隊前に勤めていた小倉陸軍造兵廠せうへいしやうで庶務課の隣接の作業課に居られた方でした。）「あゝ坂本さんではないですか。昨年入営されて以来ですが、お元氣のご様子で何よりですね」と答えると、坂本さんは「私は歩兵二中隊（中村隊）に居ます。計らずも貴方と同じ船で、たまたまこの甲板上に居たので、貴方方の砲撃訓練を見ていました。我々歩兵隊と違って、大砲の威力には感心しました。貴方も元氣で頑張ってください。またお逢いできたら、ゆっくりお話ししたいですね」と言われました。坂本さんは曹長そうちやうの階級章の横に座金の星がついていたので、見習士官だなどと判りました。腰のベルトには真新しい軍装の日本刀が下げられていました。ゆっくり話も出来ぬまま、班長殿に引率されて、我が中隊の座席に帰りました。

座席に座っている兵達の中には船酔いするものが続出し、空の飯盒に嘔吐する者もいました。川上君も訓練中は緊張していたせいか、なんともないようでしたが、座席に帰ってから船酔いが出てきたようでした。私は元来船には強く、比較的元氣で、従って船の揺れのため、かえって腹がすき、船内食も、船酔いのため食べられぬ他の兵の分まで食べる始末でした。

寝場所のないくらい「すし詰め」で兵達は身体を縮め、あくらをかき、くつつき合って眠りました。夏服ではあるが、船内は比較的暖かでした。私は眠る前に祈りました、「今日もめまぐるしい一日で、しかも甲板で砲撃訓練がありましたが無事に任務を果たすことが出来たことを感謝します。これから先の進路についても、どうか主の導きにより無事に目的地まで到着することが出来ますようお願いします。主の御名によって御前に捧げます。アーメン」。(以下次号)

大阪集会のお恵み

石丸 幸子(大阪)

大阪集会の事を書けば、何度でも書けたはずなのに、今まで何も書かなかった怠慢を申し訳なく思っています。毎月一回の大阪集会で、淀んでいた心に、新しい息吹を注いでいただき、「よかったね、こんな神様のお話は、ここでしか聞くことができないね」と晴々とした気持で、帰宅させていただいております。

先生は、北九州から日帰り、新幹線に六時間も揺られて、御用をして帰られます。朝、早く家を出られ、夜遅く帰られるのですから、体にこたえられると思います。九十歳になられて、一人で大阪に来られるという事は、普通の人には考えられない事ですが、「主が守ってくださいるので」と言われて、九十歳と四ヶ月の一九九九年八月まで、大阪集会の御用に、お一人ですべて下さいました。主の御用であれば、人数の多少にかかわらず、大変お忙しい中を、お疲れもいとわず、いらして下さる気迫と使命感に圧倒されておりました。毎回、新幹線から下車された先生の颯爽としたお姿を見つけると、今日もお元気でいらして下さったと、本当にうれしく、喜びにあふれました。毎月お目にかかれるので、大阪にいても、



先生が近くに来てくださるような、大きな安心感をいただい
てきました。

【大阪集会のきっかけ】

大阪集会の始まりの事を、時々伺っておりましたが、丸山
姉からもお手紙をいただき、年代を書いてみますと、随分昔
になるのに驚きました。丸山さんご夫妻が八幡から大阪に移
られても、恵まれる教会がなく渴き求めておられたので、一
九六三年（昭和三十八年）頃から、榎本先生が東京方面に行
かれた帰りなど、不定期に訪問されました。お二人の為に、
又、前田教会から大阪に出られた加藤さんご夫妻、大野さん
ご夫妻、それから丸山さんのご近所の方も加えられ、一九六
八年（昭和四十三年）には、月一回の定期集會が開かれるよう
になりました。夜行列車で来られ、前田教会から大阪に出ら
れた加藤さんご夫妻、大野さんご夫妻、それから丸山さんの
ご近所の方も加えられ、一九六八年（昭和四十三年）には、月
一回の定期集會が開かれるようになりました。和義先生が大
学生の時には下宿に泊まられたとお伺いしました。丸山さん
が、前田教会の会堂建設の為に九州へ帰られた一九七四年（昭
和四十九年）の後も、大阪集會が続けられました。

【大淀善隣会館のころ】

私は、一九七八年（昭和五十二年）前田教会で壮行会まで開
いていただいて、八幡から高槻へ引っ越してきました。大阪
集會が続けられていたおかげで、大阪の大淀善隣会館に寄せ
ていただきました。知らない土地に移り、家族皆がそれぞれ、
仕事や学校の問題をかかえて、不安定になっていました。私
は集會に出させていただき、主がいて下さる暖かい空気によ
り、讚美歌を歌うと、もう涙があふれて、どうにも止まら
ない状態でした。お祈りをし、みことばをいただくと、本当
に心が安らぎ、ほっとしました。神様のお恵みにより、遠方
よりいらして下さる榎本先生の御愛を本当に有難く感謝しま
した。みことばを通し、励ましていただいた事も思い出しま
す。確かではありませんが、加藤千代姉、榎本文子姉（名古屋
から）、二宮（猪城）信子姉、多屋千恵子姉、松山杉枝姉、菊池
姉、佐々木姉、太田姉がおられました。会場でオルガンをお
借りして、讚美歌を歌っておりました。帰りはタクシーに分
乗して、駅まで帰ったりしました。

【会場が江坂へ】

一九八一年（昭和五十六年）に会場は、江坂の鈴木出版ビル
の二階に移りました。菅原さん石丸さん姉妹と前田教会の水

村千恵子さんが川越正さんと結婚され、ご夫婦で出席されるようになり、賑やかになりました。川越さんに直樹くんが与えられてからは、机をベットにして、赤ちゃんと一緒のなごやかな集会でした。その頃から、正岡晶子さんも集会に導かれるようになりました。

【高槻での特別集会】

一九八三年(昭和五十八年)、私共が礼拝に出席させていただいている高槻バプテスト教会の沢野牧師より、榎本先生に特別伝道集会の御用をさせていただきたいと望まれ、その年の十月に集会がありました。十月十四日(金)、十二時八分に榎本先生ご夫妻が、新大阪駅に着かれ、午後二時より始まる婦人集会に間に合うよう、快速電車で高槻駅に着き、正岡さんと私は、先生ご夫妻から、西部百貨店五階で、味噌味うどんをご馳走になって、教会へ行きました。婦人集会の後で、お菓子とお茶が配られ、百合子奥様のお証しをいただき、先生と奥様に質問の時をもち、とても暖かく満ち足りた集会で、皆さん大変喜んでおられました。次の日は、午前十時から高槻の石丸家で大阪集会を開いていたとき、遠方から皆さんが集まって下さり、感謝でした。

金土日と三回の集会は、イザヤ書四十五章二十二節「地の

果てなるもろもろの人よ、わたしを仰ぎのぞめ、そうすれば救われる。わたしは神であって、ほかに神はないからだ」のみことばを通して語って下さいました。

十六日の聖日は、バプテスト教会あげて連鎖祈禱をして、待ち望んでいた特別伝道礼拝でした。イザヤ書四十五章二十二節を通して「主イエス様は、肉体の命、魂の命を捨て、すべてを投げ出して、わたしの罪の代償として死んでくださった。パウロがローマ人への手紙八章三十二節で語っているように、『ご自身の御子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、御子のみならず万物をも賜らないことがあるうか』と、どんな事でもできる神様が愛して下さっているのですから、問題に頭をつっこむのではなく、何の為に十字架について下さったか、主を仰ぎ見ていると、十字架を通して、望の光、恵の光を与えられる。そのお方を仰ぎ望みなさい」と心にひびく恵の集会となり、感謝いたしました。

【主のご計画】

一九八四年(昭和五十九年)四月には、正岡晶子姉、石丸道子、石丸到が大阪集会のおかげで、受洗の恵に与らせていただきました。ある日、集会の後、駅のホームで、先生が私に、

アブラハムが主から「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地にいきなさい」(創世記十二章一節)と言われて出でたった年になりました、と言われ、七十五歳になられた事を印象深く思い出します。しかし、先生はもっと深い感慨をもっておられたのだと思います。その頃、先生ご夫妻が、名古屋の和義先生宅を訪問された帰りに大阪集会にいらして下さり、予測もしていなかった事を主がなしてくださったと、大変お喜びの様子で語って下さいました。それは、和義先生が主のご愛に迫られて、夜も眠れなくなり、先生に来ていただきたいと言われ、心配し祈りながら行ったところ、献身させていただきたいとの決意を示された、とのことでした。二〇〇年の大阪集会は、利三郎先生の信仰を受け継がれ、先生のご意志を引き継いで、福岡から主の恵の福音を携えて、お出でくださっています。神様の、先の先を見て、業をなして下さるご愛、利三郎先生、和義先生の羊を養って下さる牧者のご愛、その為に祈ってくださいる百合子奥様、文子奥様、前田、大濠教会の皆様のご愛があつての大阪集会であることを感謝しております。

【病をこえて】

榎本先生は、一九八四年(昭和五十九年)と、一九八六(昭和

六十一年)と大病をされ、一九九一年(平成三年)には、先生も百合子奥様も入院され、危険な中も、切なるお祈りに応えられ、癒された事は、本当に主の御旨であったと心から、感謝しております。そのたびに、良くなれると、さつそく大阪集会にいらして下さいました。本当にありがたいことでした。先生は病気をされたご様子も見せないで、より一層迫力を増し、熱心に余すところなく語ろうとしておられるご様子でした。「しっかり信仰にふみとどまり、すでに聞いている福音の望から移り行く事のないようにすべきである」(コロサイ書一章二十三節)とありますが、榎本先生を通して語ってくださいるおことは、主の言われた事は必ず成る、という確信と、イエス様にびったり結びつき、聖霊に満たされて、溢れるように語られるので、主によって望をいただき、喜びと感謝にあふれさせていただいております。そして、いつも聖書にどうあるか、とイエス様を見上げさせていただき、今日まで守られて参りました。地上の事だけに心が奪われがちな者に、この大阪集会と、毎月送っていただく説教テープを通して、姿勢を正させていただき、支えられております。「今にいたるこそ主の恵なれ」と霊感賦二十六番の通りです。「私達は先生との出会いが与えられ、この主による希望が与えられているから、ありがたいね」とよく話し合うのですが、もつと多く

の人に伝えたいと願いながら、大胆に語れない弱さを、いつも、もどかしく感じております。

【先生との交わり】

会場は、江坂のサニーストン・ホテル、二宮さんの従兄弟さんのマンション、桑島さんの親戚のマンション、一九九二年(平成四年)には正岡和晃さんのマンションでと、移りながら続けられました。先生は、八十三歳になられておられましたが、地下鉄の階段もさっさと登られ、背筋を伸ばしておられましたが、そのお姿は、心も体も、主だけを見ておられるように感じました。行きも帰りも、時間を惜しんで、私達は先生とお話したり、先生から声をかけられ、近況をお尋ねされたりしながら、一人一人と語られていました。電車に乗られる方には、電車が見えなくなるまで、手を振って見送り、一人一人を大切にされました。私達、高槻の者や、特にお話したい方は、新大阪を午後六時六分発の新幹線に乗られるまで、ご一緒にお茶をいただきながら、個人的なお証しを聞いていただき、話し合い、ご用向きでお疲れにもかかわらず、発車ぎりぎりまで本当に親しくお交わりさせていただきました。「先生とお茶を飲む回数ほど恵まれる」と前田教会で言われていますが、その通りで、集会では味わえない主の恵に与らせて

いただき、何倍もの恵の時を楽しく、励まし、導いていただいております。

【祈りに支えられて】

この頃には、田中すえ子さんご夫妻、堀中洋子さん、正岡ハル子さん、安東倫子さん、加藤さんご夫妻、菅原泰子さん、石丸章子さん、川越千恵子さん、正岡晶子さん、松山杉枝さん、谷口道子さん、石丸幸子などが出席され、一回目の集会が終わると、正岡晶子さんがコーヒーを入れてくださり、皆さんが持参した食べ物がお皿一杯になる程でした。しばらく、お交わりの時を過ごし、二回目のお話をお聞きしました。

一九九三年(平成五年)には田中すえ子さんご夫妻が、大阪の教会で洗礼を受けられました。ご主人は車椅子でしたので、すえ子さんは大変苦勞して集会に励まれていました。しかし、残念なことです。一九九五年(平成七年)にご主人は御召天されました。

先生も八十六歳になられ、百合子奥様を牧師館に残して、家をあげられるので、携帯電話持参で、連絡をとりながら、大阪へ来られておりました。八幡では、先生が無事に御用をされて帰られるように、皆様がお祈り下さっておられた事と感謝致します。いつも守られて感謝でした。この頃から時々

和義先生がいらしてくださり、利三郎先生は、大濠の火曜会へ行つて下さつておられたとお聞きし、遠方で集会を開き続けるために、どれほど心を砕いて下さつていたかを知り、今の恵を心から感謝しております。ここでしか聞くことのできない命のみことばは、聖霊と共に働き、私たちを力づけ、励まして下さつております。

【信仰を受け継いで】

一九九六年(平成八年)から、土佐堀一丁目のYMCA会館で集会が開かれるようになりました。最初は、地下鉄に乗ったり歩いたり、聖書、讚美歌、自動演奏機まで持参していらして下さるので、申し訳なく、「お持ちしましょう」と言つても、先生はなかなか持たせて下さらない程でした。そのうち、大阪駅からバスでYMCAまで来れることがわかり、バスに乗るようになりました。いつものメンバーの他に中島恵子さん(大濠で受洗)、藤井きみさん、野口香代子さんが来られるようになりました。加藤さんご夫妻と多屋さんはお年を召しておられるのに、片道一時間半をかけて集会に来られておりました。

榎本利三郎先生は一九六八年(昭和四十三年)から一九九九年(平成十一年)まで、なんと三十一年もの長い間、大阪集会

の小さな群れの為に九州からいらして下さった事を、本当にありがたく感謝致します。一九九七年(平成九年)、一九九八年(平成十年)と、夏の間は九十歳間近の先生が、しっかりとした姿勢でいらして下さるので、年齢を忘れて、御好意を受けておりました。寒くなると肺炎になりやすので、一九九九年(平成十一年)の十月から、和義先生がご用に当たつてくださるようになりました。大学生になられた正野敬士さんが来られ、神田江里子さんが求道しておられます。九十歳にもなられる先生を、(まだ、意欲に満ちておられますが)、和義先生は、見かねて、私達の為に、利三郎先生と同じ信仰をついで、すばらしいご用をして下さっております。大濠のご用でお忙しい中を、遠方までいらして下さるご愛を、大変喜び、心から感謝しております。

私達は、この恵を、心にきざみ、導いていただいた、尊い信仰を、受け継いで行けるように、祈り求めております。いつも大阪集会の為に、お祈りいただき、ありがとうございます。なかなか歩みのともなわない者ですが、これからも、お祈りのうちに覚えてくださいますように、お願い申し上げます。

主のみ業を拝して

榎本 和義（大濠）

「神よ、あなたのもろもろのみ思いは、なんとわたしに尊いことでしょう。その全体はなんと広大なことでしょう。」

詩篇一三九篇一七節

今年四月末に、半年ほどかかっていた教会の改装工事が終わりました。振り返って見ると、不思議な出来事でした。福岡大濠公園教会は一九八五年二月に、古い会堂から新しい会堂へと改築されました。戦後、昭和二五年に建てられた旧会堂が古くなり、白蟻にやられて、建物自体が危険な状態になってきたからでした。このときも、神様のご計画により、また、多くの祈りと願いによつて、丸山兄に依頼して、現在の新会堂が完成したのです。それまで一階建てだったものが、二階建ての白亜の堂々とした会堂へと変わりました。

その時までは、榎本利三郎牧師が北九州の八幡の教会と兼牧していましたので、福岡には常住の牧師がいませんでした。会堂が新しくなって完成間近の時に、私が献身に導かれ、はからずもこの福岡に遣わされました。そのため、急遽、二階

の一部を間仕切りして、牧師館として使えるようにしていただきました。幸い、二階に台所があり、一階の奥に浴室も設置されていましたので、生活するには支障なくできるようになっていました。いろんな点で大変めぐまれた施設であります。

それから一五年近く過ぎましたが、教会の牧会活動の中で、どうしても足りないものとして、備品などを収納する場所がないことでした。一般のご家庭でも、それなりの物置場所が設置されていますが、それに相当する場所がありませんでした。そのため部屋の隅や廊下の一部に保管する状態になりました。何とかしなければと思いつつ、ここ数年を過ごしてきましたが、収納場所を確保するようなスペースがありません。あれこれと考えていたときに気づいたのが、天井裏の空間です。教会の建物が鉄骨木造の構造ですから、大きな屋根裏がありますので、そこを収納場所に利用できないだろうかと考えました。

昨年の三月ごろでしたか、さつそく以前三階の一部に部屋を造ってもらった松岡工務店の松岡さんに来てもらい、できるものかどうかを相談しました。屋根裏を見てもらいましたら、十分な空間があり、かなり広くできることが分かりました。最近では屋根裏を利用する家庭が多くなり、そのために便

利な昇降用の梯子があることも知りませんでした。これは必要な時に引き降ろして使い、普段は天井裏に格納しておくものです。とにかく収納場所を造ってもらうことになり、松岡さんの都合のいいときに、とお願いしておきました。まだこの時点では、単純に収納場所を造って貰うだけのことでした。まさか、その後の大工事に発展するなど予想だになかったのです。人の考えることがまことに目先のことしか考えられないものであり、神様のご計画がどこにあるかは、後にならないと知れないことだと痛切に思われます。

その後、松岡さんからはなんの連絡もなく、二ヶ月ほど過ぎました。天井裏に部屋を造るなど、大工さんには魅力のない仕事だろうし、大きな仕事の合間にやってくれるだろうと、考えて待つていました。四月の終わりごろ、松岡さんから電話があり、新築の仕事に掛かっているので、それが終わるまで待つてほしいとのことでした。こちらも急ぐ理由はありませんので、待つことにしました。六月の中旬ごろ、再び連絡があり、新築の方が一段落したので、屋根裏に掛かりたいのだが、暑くなつてきて、屋根裏での仕事は職人さんもやりにくいので、涼しくなる秋までのばしてもらえないだろうかとのことでした。

確かに夏の暑い最中に、蒸し風呂のような屋根裏での仕事

を、無理にお願いするわけにはいかないと思いました。ひとまずこのことは秋になってから、ということになりました。今考えると、工事にかかるのを待つことが、神様のみ業に与るために必要なことだったと思います。屋根裏の工事にすぐに取り掛かっていたら、今回の大改装はなかったことでしょうから。待つている間に、せつかくなら、浴室と洗濯場を二階へ移せないか、一階に応接室が出来ないだろうか、などの話がまとまってきたのです。松岡さんに、出来れば会堂の横にある台所を撤去して、その隣にある浴室も二階へ移設して、そこに応接室のような面談出来る部屋がほしい、と相談しました。幸いに二階には広く取ったトイレがありましたので、そこへ浴室を移せばよからうという話になりました。

ところが、その後、七月の家族会が終わって、皆さんといろんな話をしているうちに、建物の外壁の塗装がいたんでいることが指摘されました。一見したところ、まだ綺麗に見える外壁でしたが、よく見ると、表面の塗装に細かなひび割れが目立ち、下地の継ぎ目には大きめのひびが入っていました。これでは雨水が染み込んで、見えないところに腐食がでるだろうと思われました。新築以来一五年間ほど何も手当てしていませんでしたから、当然のことでしょう。私もこのような管理に知識がありませんでした。壁の表面を触ると、白

い粉が手につく「チョーキング」という状態だと教えられました。これは塗装が劣化した状態だそうです。それでさっそうく外壁の防水塗装を同じ工務店にお願いし、秋になってやつてもらふことになりました。

福岡の教会では婦人会は二階の小集会室でいたします。七月も婦人会がこの二階の部屋でおこなわれましたが、このとき二階へあがる階段を、お年を召した方が苦勞して上がってこられる様子を、偶然、家内が見まして、何とかしてあげなくてはお気の毒だ、ということになりました。一番良い解決方法をあれこれと考えたすえに、やはり車椅子も利用できるエレベーターを取り付けるのが最善ではないか、ということになりました。しかし、一口にエレベーターといつてもどうやればよいのか、費用はどのくらいなのか、管理はどうするのか、など、分からないことばかりで手がつきません。とにかく家庭用で使えるものを探すことにしました。最近では二世帯住宅などが増えて、三階建ての家も多くなり、ホーム・エレベーターの需要が増えてきたことを知り、近くの松下電工ショールームに行きました。そこで説明を受け、いろんな疑問も解消し、実際に現地を見てもらつて、施工が可能かどうかを判断してもらふことにしました。その時はじめて、昨年法律が改正され、家庭用のエレベーターが教会などの小規

模な不特定な人の集まる場所にも設置できるようになったばかりだったので。専門の方に実際の場所を見てもらつて、設置できることがわかりましたので、それもやつてもらふことにしました。

エレベーターを取り付けるとなると、玄関を入つてすぐのところを設置してもらふわけで、その分玄関ホールが狭くなるため、玄関部分も広げなければなりません。そのため、建物の一部になつていた玄関外部のポーチを玄関にしてもらふことになりました。そうなると玄関ポーチをさらに新しく作つて、雨に当たらないよう屋根も作らなければなりません。どのような形とデザインにするのが良いのか、皆目見当がつきません。また、玄関部分だけ内装の壁紙を新しくしても、その他の部分も日焼けや、経年による退色で、あまりに新旧がはつきりとしてしまうので、会堂の内部も壁紙を張り替えようということになりました。つぎつぎと、まるで玉突きのように、一つのことを始めると連鎖的に工事箇所が広がつてきました。とにかく、何をどうしたらよいのか、まずは折ることからはじめました。費用も、工事期間もなにはつきりしないのですから。

会堂の壁紙を替えるなら、出来ればやつてもらいたいことがあります。それは、ロビーから会堂に入る正面の入口が、

会堂の真中になつていなくて、正面の講壇からみると、二〇センチほど右にずれていました。そのため、結婚式や葬式などで、椅子を並べると、会堂の中心線と入口の扉とがずれて、すこし不恰好になり使いにくい構造になっていました。それを修正して、入口を中心線に合わせるように作り変えられぬいか、と尋ねましたら、松岡さんは、それは出来ないことではないから、ついでにやっておきましょうということでした。

一〇月になり、松岡さんからそろそろ仕事に掛かりましたよといつてこられました。私もいよいよこれが主の備えたときだと信じて、お願いすることにしました。全体の見積を出してもらつて、検討しようと思いましたが、松岡さんにもどこまでやるのか、はつきり言えない状態なので、とりあえず出来高払いでやつてもらうことにしました。というのは、全体の計画をきつちり立ててやるのも一つのやり方ではありませんが、その際は、途中で止めることが出来ませんし、全体の資金を前もつて準備しておかねばなりません。しかし、主に従つて事を進めようとするとき、神様は前もつて全体のご計画を示される方ではありません。目の前の一步を主の導きと信じて踏み出すとき、次に主はなにをなすべきかを教えないままです。ですから、この度の工事も主がなさることでありますから、主に従つて進む以外に私のなすべきことではないので

す。これはある意味で私に対する神様の信仰の挑戦であつたと思います。手元に資金が豊富にあり、工事の内容も細かく決まつていて、工事期間も何時までと契約され、万事万端を整えてしまつてのことであれば、神様に従う余地はありません。たしかに、あれもしたい、こうもしたい、という願ひはありますが、それが本当に主がせよと命じられることかどうか、絶えず祈りつつ、一つ一つに主の導きを確信して歩まねば、すべての栄光を主に帰すことができず、自分の計画、自分の力を少しでも誇るところとなるでしょう。この工事を通して、私の願つていたことは、なんとしても主のみ業に与り、主が働かれることを鮮明にして頂くことでした。ですから、自分の知恵や力は勿論、人を頼り、当てにすることだけはしないようにと決めました。といつて、人の意見を排除するわけではありません。教会の皆さんとも事あるごとに、お掃除の後での交わりの中や、家族会の後での交わりなどでも、話し合いもし、皆さんの希望も聞きました。そこから得られる意見を尊重しつつも、なお、主の御心を求めて祈ります。結果は誰の意見でもなく、主の導きです、との確信にたつて進んで参りました。

一〇月五日頃から、取敢えず、会堂入口の移設に掛かることになり、会堂とロビーとの仕切り壁を取り払うことになり

ました。素人考えで、入口を移すのだから、その部分とその周囲だけ工作すればいいのだろうと思っていきましたら、なんと工事が始まってみると、仕切りの壁をすべて撤去し始めたのです。これは大変な工事になったと思えました。壁が取り除かれ、台所としていた部屋も会堂の一つになって広がりました。九日は土曜日で、お掃除に来られた方々から、会堂が広々として気持がいいですね、このままにしてはどうでしょうか、という要望がだされました。それまでは会堂を広げようなどとは考えてもいませんでした。言われてみて、なるほど会堂が広くなり、椅子もゆつたりと並べられ、なんだか気持が大きくなるように感じました。大工さんは再度新しく仕切り壁を作ることにしていました。もし会堂を広くするならば今の時しかない、強く思われました。

とにかく、その午後、松岡さんに来てもらって、会堂をひろくして、入口と通路を横にとりたいが出来るだろうか、と相談しました。そのためには婦人用のトイレも手を入れなければなりません。現場であれこれと検討して、出来そうかどうかということになりましたので、それでは新しい壁は作らず、台所としていた部分も会堂の一部に加えて、広くすることにしました。松岡さんが帰るとき、「先生、もう変わることはないでしょうね」と念を押されました。というのは、すでに新し

い入口の部材を加工していたからです。「大丈夫、この案でいきましよう」と答えたものの、さてこれからどうなるだろうかと不安もありました。その夜、祈っていましたとき、「主を待ち望め、強く、かつ雄々しくあれ。主を待ち望め」詩篇二七篇一四節の御言葉が与えられました。自分のうちに、なんとか自分がかんばってやらなければ、と思いつめているところがあることを教えられて、そうだこれは主がなさることなのだから、主に信頼していけるところまでいけばいい、途中で止めよといわれるなら、それでもいいではないか、教会は主のものであって私のものではない、今は主が働かれるときだ、と確かな信仰を与えていただきました。

いよいよ、工事が本格的に進みだしました。騒音と埃の毎日でした。以前ホールだったところも、台所だったところも一つの会堂になり、窓枠のサッシも、生産中止になっていましたが、何とか在庫を見つけてもらって、これまでのものと全く同じ物を取り付けることができ、婦人用トイレの中にあつた洗面台をトイレの外に移して、気持のよい化粧台に替え、トイレの中も個人の住宅のように温かみのあるものにしてもいました。会堂の床の絨毯も、広げた部分だけ取り替えようとしていましたが、既設の部分と色が合わず、床だけちくはぐになるのもおかしいので、全面的に張り替えることにな

りました。これも最初に計画していたことではありません。一つ一つ手を付ける度に、主がさせなざる必要があるのだと思いました。玄関周りも新しくポーチを作ることにして、設計士に依頼しました。出来てきた青写真を見ると、これまで思いもしなかった形のもので、半円形の屋根で銅版葺き、両脇に円柱の柱、という姿でした。高齢者や障害者のためにスロープを取りたいとあれこれ考えましたが、スロープにするにはスペースが少なく、結構急なスロープになることがわかり、そちらのほうがかえって危険だろうということで、階段ではあっても、段差を低くして、車椅子でも乗り越えられるようにと作ってもらいました。玄関の扉も以前の物を使う予定でしたが、入口を高く広くしたいとの希望があり、ガラスの入ったアルミの扉に替えました。そのため、玄関内部が扉を閉じていても明るくなりました。エレベーターを取り付けるために、どうしても会堂の窓が半間分ふさがれてしまいます。そのことは一つ残念でしたが、止むを得ないことでした。会堂の拡張、婦人トイレの改修、玄関周り、ポーチ、アプローチのタイル貼り、など、一階部分がほぼ終わったのが、二月末のことでした。

年末から、お正月過ぎの一月一〇日頃まで工事はお休みになりました。この二週間ほどは静寂が戻って、静かに新年を

迎え、新年聖会が広くなった会堂で行われました。聖会の御言葉が与えられました。「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神」(出エジプト記三四章六節)、「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない」(ヘブル人への手紙一章六節)、「子たちよ、キリストのうちにとどまっていなさい」(ヨハネの第一の手紙二章二八節)との御言葉を通して、主のご愛と恵を覚えさせていただきました。私にとっては、実際に改修工事が進行中であり、総額どの位の費用が掛かるのか、全く見当がつかないなかで、ただ祈りとみことばに信頼していく以外にない状態になりましたので、この新年聖会でのみことばは主に信頼して進む土台でした。というのも、工事全体がどこまでなのか、全く見通しがないわけです。工事を進めて行くうちに、あそこを手直し、こちらも新しく、というように、工事が増えていくばかりで、全体としての予算が立たないのです。まさに神様の導かれるままに進む状態です。手元のお金を見ながら、するかしないかを選ぶわけにもいきません。するべきことなら、しなければならぬ。主の御心ならば、そのための必要は必ず備えてくださる、との信仰に立たねばなりません。確かに主は生きておられます。建築献金の袋も用意しましたが、格別、皆さんに強く要請したことはありません。し

かし、思いがけない方や、遠近各地から、工事のことを耳にして、喜びと感謝のうちに、捧げ物をしてくださるかたがづつぎと起こされました。このことによって、多くの方々がこの教会を通して、イエス様を愛し、主に連なっておられることを教えていただき、大変励まされました。

改装工事は順調にここまで来ましたが、もう一つ頭を悩ませることがありました。それは納骨堂のことです。平尾霊園に教会の墓地があり、そこに立派な納骨堂があります。これは昭和四二年に建てられたものです。しかし、どうゆう原因かわかりませんが、ここ十年ばかりの内に、だんだん傾いてきたのです。昨年の一〇月に墓前礼拝の準備に墓地を掃除しましたとき、納骨堂の傾きがかなり激しくなっていました。大きな御影石を積み重ねた納骨堂でしたから、何かの拍子に崩れるのではないかと心配になりました。また、納骨堂の前場所もコンクリートが破損して、その下が空洞になっていました。雨水によって、土がながされたのだと思います。納骨堂の入口は重い石の蓋で覆われ、入口もせまく、内部は換気が出来ず、常時湿気が多くて、預かっている骨壺に水が溜まる状態でした。なんとか早急に手を打たなければならぬか、と思いましたが、どこからどのように手をつけたらいいのか、分かりません。ちょうど、会堂の工事に掛かりましたので、

松岡さんに相談してみました。さっそく、墓地に来てくれて、水平器で傾斜度を測って、現状を検討してくれました。その結果、やはり応急の処置より、抜本的にやり直したほうが良いでしょう、ということになりました。幸い、大工さんの後輩の方が九州石材にいらっしやるから紹介しましょうと手筈を整えてくれました。ここでも神様がすべての必要な人々を備えてくださったことを感謝せざるをえません。九州石材の西嶋さんという方が担当してくださって、すべて御影石を使って仕上げることにして、設計図を書いてくれました。いろいろと検討を重ねた結果、入口を広くして出入りし易くする、通気性を良くして内部を気持よくする、出来るだけ多くの収納が出来るようにする、などの点を決めて見積をお願いしました。

しかし、実際に改築できるかどうかわかりません。教会の改装が始まっていますし、それと同時に、納骨堂の改築をするとなるとどうしても手に余るのが現実です。またもやお祈りするほかありません。納骨堂を先に延ばしても、いずれはやらなければならぬのですから、それが今であるのか、主の御心はどこにあるのか、まずそのことを切に祈りました。確かに、見える状態で考えるなら、止めておこうというのが、妥当な結論でしょう。しかし、主がなさることであれば、そ

れに従うほかにありません。一二月二〇日ごろでしたか、九州石材から具体的な提案と概算の見積が出てきました。ひとまず、そのときは説明を受けるだけにして、結果は年が明けてから返事することにしました。幸い、新年聖会もありますので、主の御旨をはっきり知るために祈る時間が与えられました。その中から与えられた御言葉の一つが、「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない。なぜなら、神に来る者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである」(ヘブル一章六節)でした。新年聖会での年頭のお言葉でもありますが、このお言葉を握つていのりました。

祈りつづけている間に、心にはつきりと確信を与えていただきました。神様がいらつしやること、また神様が報いて下さるかたであることを固く信じるならば、私の計算や頭の中での計画は何の意味もない。神様がすべてを動かし答えを出してくださるのだ、と主を信じて進むことにしました。勿論、事柄がすべて願ひ通り、思い通りになると信じたわけではありません。どうなるか分からないけれど、大丈夫、主が一番良いことをしてくださる、と信じました。たとえ、無責任な結果になり、恥をかこうとも、それでよしと心を定めました。一月二四日に納骨堂の改築を契約しました。なんとかイース

ターの墓前礼拝までに完成を希望しました。寒い間はコンクリートの固まりが悪いので、少し暖かくなる三月の中旬から工事にかかりました。幸い今年の復活祭は例年より遅く、四月二三日でしたから、それまでに完成させましようということになりました。

一方、教会の改装工事のほうは、一月一〇日から再開されました。外壁の防水塗装をするために足場をかけることから始まりました。今年の一月一〇日はちようど休日にあたっていましたが、工事を進めるためにはどうしてもこの日に足場を組まなければならず、朝から作業に入りました。足場を組み上げるには結構騒音が出るものです。周囲は休日とあって、ひっそりとした静かな日でしたが、教会だけはガチャガチャと騒がしくやっていましたので、隣近所に大変迷惑をかけただろうと思います。私も落ち着かず、身の縮まる思いでした。なんとか一日で終わり、翌日から、エレベーター塔の組み立てが始まりました。年末までに基礎部分のコンクリート打ちが終わってしまいましたので、柱で外枠を組み立てる作業です。一階の玄関ホール右側にエレベーター用の入口が出来、二階は物置にしていたベランダの所に乗降口が出来ます。工事は順調に進んで、外壁が出来上がり、それに伴って、二階部分の工事に移ってきました。二階は広く取っていたトイレを縮

小して、男女兼用のものを二箇所にとり、そのあとの空間にユニット・バスを設置することにしました。三階へ上がる螺旋階段を撤去して、そのスペースを洗濯場と脱衣場にあて、代わりに新しく直線の階段を取り付けることにしました。既存の設備を取り壊したり、移設する作業が続きましたが、トイレが完成し、ちよつとした物入れのスペースも取れて、ユニット・バスが完成しました。かつての螺旋階段に代わる階段も新しく作られました。新しいところの壁や床が既存の部分と違いすぎるので、既存の所もすべて壁紙をやり変えました。二月初めには外壁の防水塗装も終わりました。

二月の末に二階部分が完成して、いよいよ屋根裏の倉庫を作ることになりました。屋根裏には倉庫だけでなく、一部分に予備室として使える部屋を設けることにしました。倉庫部分には電動式の梯子を取り付け、二階の廊下から直接入れるようにし、部屋の部分には階段を取り付けて、物の出し入れや人の出入りが出来るようにしておきました。大きなものは階段から持ち上げて、予備室を通って倉庫へ入れるように入口をつけることにしました。屋根には明かり取りの天窓も付けて、通気を良くするようにしました。こうして、神様は知恵を与えてくださって、思うよりも願うよりも素晴らしい倉庫を与えてくださいました。幾分天井が低くて、左右に傾斜

しているので動きにくい所ですが、常時そこにいるわけではないので、十分に収納庫としての役割は果たしてくれそうです。

寒さも和らいで、日差しも強くなりかけた三月一〇日、いよいよ納骨堂の工事が始まるので、収納している遺骨を教会の会堂にある洗礼槽に保管することになりました。石材工事の方々も手伝ってくださって、有志の方々と骨壺をふきあげて、丁寧にダンボール箱に入れ、教会へ運びました。現在約七五個の骨壺があります。それだけのものを保管するには、会堂の講壇下にある洗礼槽が一番よい場所でした。こうして納骨堂の工事が始まりましたが、お彼岸のために途中で一週間ほど工事が出来ませんでした。しかし、天候も祝福され、四月のイースターの完成を目指して工事は進捗しました。

四月になっていよいよ屋根裏の工事もすべて終わりました。残すところは、会堂奥にある旧浴室部分を応接室にする工事だけになりました。これまで来客者との面談や相談事ができる部屋がなく、台所の食卓や小集會室を使っていました。それらは二階にありますので、上がってこなければなりません。なんとか気軽に入ってもらおう部屋があればと願っていました。会堂の奥になりますが、玄関からすぐに入れますので、便利ではないかと思いました。ただ、あまり広くはとれませ

んが、そこには簡単な流しを造る事にしました。それは会堂でお茶を出す時などのことを考えたからです。それほど頻繁にお茶を出すときはありませんが、年に一、二度はありますので水場を設置しました。普段は化粧板で隠すようにしてもらいました。こうして冷暖房も備えた四畳ほどの応接室が出来ました。

昨年の一〇月以来の工事も、やっと四月二一日にほぼ完了しました。長いようでも、終わってみると短かったような気がしました。この間にいろんな人たちを神様が備えてくださったことをあらためて感謝しました。大工仕事とその他の必要な工事の手配・管理をやってくれた松岡工務店の松岡さんと松崎さんにはいろいろ我儘な注文をだしましたが、心を込めて忍耐強くこちらの希望をかなえてくれました。ほとんど毎日顔を合わせていましたから、家族のような気がします。電気工事の松本さんは奥さんと二人でいつも来てくださって、新しい冷暖房の取り付けから、屋内配線の整理・増設と使い易いようにと考えてくれました。設備工事の日高さんは排水路の付け替え、トイレの配管など、目立たないところでの工事でしたが、責任を持ってやってくれました。左官仕事の矢野さんは玄関周りのコンクリート打ち、エレベーター・ピットの基礎工事など、左官仕事を引き受けて実に丁寧な仕事を

してくれました。ペンキ屋さんは外壁の塗装から建具の塗装まで、一手に引き受けて綺麗にしてくれました。年末の大晦日まで来てくれて、寒い風に吹かれながら、玄関ポーチのタイルに段差がはつきり分かるように黄色いペンキで細い線を入れてくれました。サッシ工事は戸畑さんが担当して、製造が中止になっている会堂の窓枠を捜してくれました。内装は西日本インテリヤ工業の柴田さんとその仲間の方々が引き受けて、壁紙から絨毯まで全てを張り替えてくれました。その他、建具屋さん、タイル貼りの左官さん、屋根を葺いてくれた板金屋さん、エレベーター工事やユニット・バス工事を専門にする方たち、廃材・不要物を廃棄してくれた産廃業の方など、多くの人々が力を尽くして工事に携わって完成してくれました。

こうして、神様は全ての必要な人々を備え、ご自身の御業を全うされました。古いものから新しいものへ、良いものからさらに良いものへと、神様は休むことなく私たちに変わる事を求めておられるのだと思います。とかく、「もう、これで充分」と腰を落として休んでしまおうとしやすい者たちに、奮い立たせ、信仰に堅く立つ訓練を与えてくださいました。このたびの工事を通して、建物ばかりではなく、主の前にある私たちも、神様は日々に新しくなることを願っておられる

のだと確信させられました。そのために主は毎日に私たちを取り扱っておられます。神様が私たちに願っておられる標準はキリストの栄光の姿へと変えられることに他なりません。

この間、三月下旬になり、納骨堂の工事も進み、新しい墓碑銘を入れてもらうことになりました。山本姉にお願いして、御言葉を書いていただきました。与えられた御言葉は、ピリピ書三章二一節「彼は、万物をご自身に従わせうる力の働きによって、わたしたちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じかたちに変えて下さるであらう」との言葉です。

墓碑には全てを書くだけの余地がありませんので、「わたしたちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿にかえてくださる」とだけ書くことにしました。これはやがて地上の生涯を終わって、天に召されるとき、主の栄光の姿と同じ姿に私たちを変えて下さるとの約束こそ、今を生きる望であり、また死を乗り越えて与えられる永遠の命だからです。

これにちなんで、教会墓地に「栄光陵」と命名しました。

納骨堂は急ピッチで工事が進み、イースターを迎える前日二二日に完成しました。新しい納骨堂は赤御影石の墓碑と台座の下に、白い御影石で納骨堂が生まれ、納骨室内も御影石の棚が三方に三段の配置で設けられ、床も石貼りになり、背面の石の扉をひらくと、室内の中心に磨かれた円柱の柱があ

って、全体を支える構造になっています。なんだか思いがけないほどに立派なものができあがりました。神様のご用に用いられるものとして、最高のものを捧げることが出来て、感謝せざるをえません。四月二三日はイースター礼拝後、新しくなった納骨堂の献堂式と墓前礼拝、先に召された大谷姉と平野兄の納骨式を執り行うことになりました。当日はさわやかな春の晴れた日でした。朝から、工事担当の西嶋さんが念入りに掃除をして、石を磨いてくれました。墓碑は白い幕に覆われていました。賛美のうちには除幕が行われ、赤御影にクリーム色の筆文字でみ言葉が刻まれた墓碑が姿をあらわしました。集まった七〇人ほどの方々とともに主の恵を心から感謝しました。まだ全ての遺骨が納められていませんので、皆さんで納骨堂内に入って見ました。「はやくここに入りたい」と言う方もおられて、大笑いしました。四月二十七日、有志の方々と会堂に保管していた遺骨を再び墓地の「栄光陵」に運び入れ、すべてが終わりました。

こうして教会堂の内外の改装、納骨堂の改築と、思いがけなく始まった激動の半年も、振り返ってみるとき、誠に不思議な神様のみわざであったと言うほかありません。その間、わたしは主が先立って進まれるのに、ただ遅れないように付いて走ってきただけです。全ては主のなさったこと、また、

主が備えてくださって、新しい千年紀に向かって押し出して
くださったことです。ここで再び心を新しくして、主のご愛
と恵に応えて、御旨にかなう者とならせていただきたいと願
っています。目に見える教会堂や納骨堂ばかりでなく、内な
る宮である魂も主の清さに与るよう、いよいよ清めていた
だきたいものです。また、工事の完成で事を達成したのでは
なく、もうすでにこれは終わったことですから、「後ろのもの
を忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、目標を目
ざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神
の賞与を得ようと努めて」参ります。

二〇〇〇年 九月





2001年 1月14日

福岡大濠公園教会



2001年 1 月 1 日

八幡前田教会 (1)



2001年 1 月 1 日

八幡前田教会 (2)



2001年 1 月 1 日

八幡前田教会(3)



2001年 1 月 1 日

八幡前田教会(4)

編集後記

◎『ぶどうの木』第二八号をお届けします。

◎『神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている。』（ローマ人への手紙八章二八節）
一つ一つの恵みのうちに、主のご計画があることを教えていただき、感謝でした。

◎『わがたましいよ、主をほめよ、
そのすべてのめぐみを心にとめよ。』

（詩篇一〇三篇二節）

恵みを心にとめ、忘れないようにするため、今後もお証、またカットなどを随時募集しております。

◎発行が大変遅くなり、すみませんでした。

発行 二〇〇一年三月

発行者 北九州市八幡東区前田一―一〇―三

基督伝道隊 八幡前田教会
牧師 榎本利三郎

発行所 基督伝道隊

八幡前田教会
福岡大濠公園教会
戸畑教会

印刷製本 北九州印刷株式会社